**№16　テーマ『人格の深さをつくる』**

**講話日2003年5月26日**

**司会：ただいまより、５月度集合月曜研修を始めます。お願いします。**

**一同：お願いします。**

**芳村：よろしくお願いします。**

**司会：着席。始めに社長よりお話をいただきます。社長、お願いします。**

**社長：はい、ご苦労さまです。それぞれ営業も工務も設計もですね、山ほど仕事を抱えてますね。だから、相当、段取りするの大変なんですが、手帳がね、統一されてまして、１カ月、もう２カ月先までの予定がね、全部、おそらくこの中で、まだどうかな。半分ぐらいは年間行事予定を記入してない人がいるんじゃないかな。だから、必ずもう予定は決まっているので、仕事の調整をね、してください。それと、今もちょっと注意されたケースがありましたけども、家でね、ごろごろ寝てるのは勝手にしてください、ね。家でお酒を飲むのも自由です、ね。家の庭でゴルフをやろうが、穴掘ろうが、勝手です。が、会社の中では勝手は聞きませんよ、ね。お客さまからお仕事をいただいて、お客さまからお金をいただいて、僕たちは効率よく仕事をして、人の２倍も３倍も働いてね、効率よく仕事をして、お客さんに喜んでいただいて、ね、また自分たちの給料も上がっていくわけですね、ね。それを間違わないでくださいよ。会社の中にいて、組織の中でぶら下がってる人たちがいっぱいいますよね。組織の中で、後ろから付いていこうとしてる方がいっぱいいるわけです。**

**特に能力判定テスト、エコグラム、NBCのテスト結果から見るとね、大半の人がそういう人なんですよね。この中にいる大半がそうなんですよ。だから、自分の現状把握をきちっとして、ね、自分はそういう人間であるということを自覚して、ね、人の目も意識して、ね、１歩出るところをね、２歩も３歩も出るという努力をね、していけば、仕事上のね、人間性においてはね、大いに改善されます。その分ね、家でゆっくりしていただくということは大いにけっこうですが、仕事はですね、これでいいやでは済まされません、ね。個人の性格がこうだからとかね、僕の性格はこうだからとかね、僕は記憶力が悪いからとかね、僕は専門知識がないからとかね、まだ経験がないからとかね、今日はちょっと疲れてるから、休ませていただきますとかね、そんなこと、本心でお客さんに言ってみたら、えらいことになるよね。それを隠し隠し、だましだましやってるわけだ、ね。それが結局はお客さんに必ずばれるからね。そういうことはやめていただいて、お願いしたい。**

**残業時間の問題だとかね、休みの問題だとか、有休の問題だとか、できたら勤続10年以上ね、勤めている人というのは、だいぶ体力的にも大変な人だと思うけども、２週間ぐらいのね、有休だとかね、勤続５年以上で１週間ぐらいの有休だとか、ね、百五銀行さんがいいこと言われたけど、あそこは150日休みがあるそうです。その中に９日間だけ、有休の強制的に使わないけない日数を入れて50日です。だから、141日休みなのね。それ以外に有休あるでしょうと。いや、僕、40日ぐらい、それ以外あります。ええ、なんていってね。この40日、いったいどうなるの。いや、もうこれはもう買い取りも何もありません。なくなるんです。ただし、新入社員から幹部までね、年間９日は必ず取りなさい。これは強制だそうです。その強制を入れて150日。どうもそれが、労働３法のぎりぎりみたいでね、あと20日、50日、残ってる人も、みんなそれはなくなるわけですね。150日というとね、すごく僕らから見るといいなと思いますが、その辺はね、大企業と、中小企業の違いでね、僕たちは働くしかないからね、ね。もし働きたくなければ、まず東大へ行っていただいて、できれば、法科を卒業して、ね、通産相でも、大蔵省でも入っていただける、銀行でも入る。でも、なかなかね、当然、私も含めて、そういうところに行けないメンバーで構成されてますので、働くのは当たり前というところですね、ね。ちょっと最初からね、嫌な話をしましたが、今日はね、先生のお話を聞かせていただきたいと思います。では、よろしくお願いします。**

**司会：ありがとうございました。それでは、芳村先生、よろしくお願いします。**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：今日は本当にお忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございました。今日は、前回に引き続いてですね、この人格を磨くという、そういうテーマの中で、人間性の深さですね、人格の深さをつくるという、そういうテーマでお話をさせてもらいたいと思います。これは前回も高さのところで申し上げましたけども、この感性論哲学というのは、この感性の実感と本音というものを大事にしながら構築していく哲学で、この理屈でつくりあげていく哲学ではないんですね。ですから、前回もそうですけど、今回もまた自分はいったいどういう人に人格の深さというものを感じるだろうかということをですね、思い出していただきながら、聞いてもらったら、よくわかると思うんですね。いったい自分はどういう人に人格の深さを感じるだろう。そこでまず、その深さとはなんなのかということをですね、端的にこの言うならば、どういうふうに言うことができるか。これも非常に難しい問題なんですよね。よほど自分の意識を凝縮して煮詰めていかないと、そういう言葉の規定というのは出てきませんので、非常にこれは言わんとするとなかなか難しいことですけども、結論的に申し上げるとですね、この深さというのは、物事のより根源的で、より本質的な意味と価値を感じ取る感性というふうにですね、言うことができるわけであります。**

**で、人間の心というのは、意味と価値を感じる感性だっちゅうことは、何回かもうすでにお話をしておりますけども、人間の心は意味と価値を感じる感性である。だから、人格の高さをつくろうと思ったならば、価値への情熱、すなわち、どこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真実なるもの、より善なるもの、より美しいものを求めていきたい。これが、人間の心というものが意味と価値を感じる感性であるから、だから、人格に高さという高貴さですね。人格の高貴さ、高さというものをつくっていこうと思ったならば、われわれは価値への情熱に燃えなければならないということになるわけですけど、この深さというものもですね、やっぱり、この深さとは、物事のより根源的で、より本質的な意味や価値を感じ取る感性、それが深さなんですね。そういう力を成長させていくとですね、そうすると、なかなかあの人は深いなと、こう言ってもらえるという、そういうことになるわけであります。**

**とにかくこの人格の高さ、深さ、大きさというものは、それを成長させていくことによって、この人を感動させる力というものをですね、持つことができますので、その意味で仕事をする上ではですね、やっぱり、さすがにプロやと、こう言ってもらえるような力を持って仕事をしなければ価値がないわけですから、半端なその相手から、称賛されないようなというかですね、相手から一目置かれるということがないような、そんな半端な力で仕事をしようっちゅうのは、やっぱりおこがましい話であります。やっぱり、お客さんに対して接する時には、その人から、さすがにプロだと言ってもらえて、初めてそれが仕事になるわけであって、そういうこの、さすがにプロと言ってもらえる、その内容の中にですね、この人格の高さ、深さ、大きさというものが関わる基本原理が全部含まれてるわけですね。そんな意味で、今日のテーマは深さということですけども、どうすればですね、相手よりも、より根源的で、より本質的な意味や価値を感じ取る感性というものを自分の、自らの言動の中でですね、表現することができるのか。これはやっぱり、プロとして仕事をする上には、なくてはならない重要な課題であります。**

**この深さというのは、いったいどういうふうにしてできてくるんだろうということですね。この人間の意識というものは、基本的には、外の世界の構造を写し取って、そして内面的世界を構成していくという、そういうふうなこの構造になっておりますので、もっぱら人間の意識、あるいは人間の目というのは外を向いてるわけですね。外を向いておって、外の世界を内面に取り込んで、そして内的世界を形成していく。これが、このあらゆる生物が基本的に生きるためにする活動であります。外の世界と内的世界が相似形というかですね、同じ構造を持っていなければ、現実の社会の中で、現実の世界の中で自分の肉体を動かすという行動を取れません。外の世界と自分の内面が違っておったならばですね、外の世界で迷ってしまいます。だから、認識というのは、外の世界の構造、自然の構造、宇宙の構造を自分の内的世界に写し取るという、そういう仕方でですね、人間は外の世界に対応し、適応しですね、そして、この外の世界を自由に羽ばたくということができるわけですね。**

**われわれが知識をたくさん持たなきゃならんというのは、この知識の数だけ人間は自分の自由度を拡大することができる。自分の持ってる知識の量が、結局は自分の世界の広さを決定するわけですね。あまりたくさんのことを知らなければ、その範囲内でしか行動はできませんし、まずその範囲内でしか選択はできません。いろんな知識を持てば持つほど、自分の選択肢とですね、それから、自分が自由に行動できる世界が広くなる。だから勉強せんないかんということになってくるわけですね。勉強せんことには損をすると。知らんかったら、あることもわからないんですから、それだけ損をするわけですよね。いろんなことを知っておったら、その中からどれを選び取るかという、選択するという自分というものがですね、出てきますから、それだけ自分の自由度が増していく。とにかく意識というのは、そういうふうにして外の世界を写し取る。そのことによって、内的世界を構築していく。そして、外の世界と同じものが内的世界にできあがった時に、自分は最大の自由を獲得し、最も強い生きる力というものをですね、持つことができる。その意味で、知は力なりとこう、近代はいわれたわけですけども、これもやはり、いかに感性の時代になるとはいえですね、人間は理性と能力を持っとる限りは、よりたくさんの情報、よりたくさんの知識、よりたくさんの技術というものを獲得することによって、自分の自由度を増し、自分が思い通りにですね、世の中を生き抜いていけるという力をつくっていくことができるわけであります。**

**そういうふうにこう、一応、意識というのは外を向いてるんですけども、意識が外を向き、また、目が外を向いてる限りはですね、深さはできません。深さができるためには、自分の心を掘り下げていくというですね、そういう作業をしないと、この深いという、そういう人間性はできません。外を向いてる限り、どんなに頭がよくったって、外を向いてる限りは軽薄な人間であります。だから、いかに勉強して東大に入ってもですね、その人が自分の心の内面を掘り下げるという努力をしていなかったならば、頭はいいけど、非常にこの軽い人間、軽薄な人間、そういうことになってしまいます。実際問題、東大に入ったからといって、みんなそういう、この人間としてのですね、素晴らしさを持っておるわけではない。多くの人間が、人格的に非難されるようなですね、そういうこの失態を人生において繰り返し見せております。その意味では、この深さというものをつくるということはですね、勉強してたくさんの知識を獲得していくということは、また全然、別個の原理によってですね、この成り立つ世界だということが、見えてくるわけであります。**

**とにかく深さというものをつくっていこうと思ったならばですね、外に向かっておる目を、自らの内心をのぞき込むという、内省や自省の目に転換していくということが必須の条件であって、そのことによって、自分自身の心の中を見つめてですね、そして、自分の心の中を深く掘り下げていくという、そういう作業ができることになるわけであります。この人類史をたどればですね、その人類としてのですね、人類としての人間の深さというものが、人間性の中に形成されたのは中世の時代でした。中世の時代というのはですね、西洋ではキリスト教という宗教が支配して、そして、すべての人々が神という、そういうこの観念を持ちながら、神というものを意識しながらですね、自分というものをこう、見つめるような、そういう生活をしておったわけですし、東洋においても、やっぱり、仏教というものがですね、この支配する、そういう宗教支配の時代がこの東洋においても、中世の時代というふうに、言うことができるわけであります。**

**仏というですね、その人間を超えた存在、精神的実体である仏というものを意識することによって、われわれは自分自身の不完全さ、至らなさ、罪深さ、そういうものをこう意識して、そのことによって、この心というものをですね、鍛えていく、磨いていく、あるいは、自分自身を反省することによって、いろんな気付きをですね、この持って、そして、このより深い生き方ができるというふうな、状況になってきたわけですね。そのキリスト教というのは、神を意識するという、そういうこのことを強烈に人類に要求するわけですけども、神を意識することによってですね、この人間は、人の目をごまかすことはできてもですね、神の目からは絶対逃れることができない。自分が何を思っておる時でも、何をしておる時でもですね、その人の目を避けてですね、そして、そのごまかすことはできてもですね、神はどこにおっても、いつでも自分の心をですね、この見つめておると。神の目からは逃れることができないという、そういうこの強い自覚を持つことによって、人間は自分の生き方をですね、正していき、また、自分の至らなさを自覚し、自分の不完全さというものを嘆くようなですね、そういうふうなことによって、だんだんと、この心の中を深く見つめていくという、そういう力を獲得したわけですね。**

**ですから、西洋における文化の深さというのはすべて例外なく、すべて中世のですね、宗教の時代につくられたものであります。その中世の時代を経過して、近代は壮大な、その科学技術文明というものを西洋人はつくったわけですけども、それ以外に西洋にもさまざまな深いですね、文学が存在しますけど、そのシェイクスピアの文学でも、トルストイの文学でも、その中に出てくる深さを表現するものは、すべて宗教的なですね、その根源というかですね、教養がその中にあって、そして、この物事の考え方の深さというものが、表現されておるわけであります。また、西洋人がつくった近代科学技術文明というものもですね、何故にこういう高度な科学が発達したのか。その原因として、この文化史的にですね、いわれることは、中世において、西洋人の方々がですね、神を意識しながら、自らの人間性を深く掘り下げていった。だから、その深く掘り下げていった深さに対応する高さが、高度な科学技術文明として構築されたんだというふうに、いわれております。**

**これは原理としては、高く飛び上がるためには、深く屈伸しなければならない。どれだけ、その屈伸するですね、その抑えるエネルギーというものが強いかによって、どこまで高く飛び上がることができるかというエネルギーが決定されるわけですから、どこまで力をためてぐっとこう、自分を抑え付けてですね、そして、ぱっとそれをこう離せばですね、その反動で高く飛び上がることができる。これはバネでもね、ぐっと抑え付ける力が強ければ強いほど、その反動で伸びる力がこう、強いわけですから、そういうこの力学的な構造がですね、命にもあって、それがこの近代の、西洋の壮大な、高度な科学技術文明を形成されたんだというふうに、いわれております。その意味では、われわれが自分の個性というものをですね、存在感のある、輝くような、そういうものとして表現しようと思ったならば、われわれは、自らの内心を深く掘り下げなければですね、自分の個性の高度な輝きというものを外に表現することはできません。個性というものを磨き出そうと思ったならば、われわれは自分自身の内心を深く掘り下げるということをですね、していかないと、個性というものを磨き出すこともできない。**

**これから個性の時代ですからね、十把一絡げという、そういうこの存在感のない、置き換えの利くような人間になったのでは、ただのこれは機械的に扱われる存在であってですね、自分という価値を表現することはできませんから、だから、これからの個性の時代においては、何かしら、やっぱり、他人からですね、さすがにプロやと、さすがだなと、こう言ってもらえるような、そういう独特の能力と人間性というものを持ってですね、組織の中でも輝かなければならないし、また社会においてもですね、そういう存在感というものを多くのこの方々に感じてもらえるような自分というものをつくらないと、生きることが楽しくないですよね。やっぱり、他人から一目置かれるというものがあって、初めて人生は楽しいので、全然存在感がない、全然目立たないというかですね、全然個性がないという、そういうふうな状況ではですね、自分自身が楽しい人生を生きることはできません。そんな意味でも、自分の個性というものを輝かせようと思ったらですね、自分の内心、感性の世界を深く掘り下げていく以外にですね、自分の個性を高く輝かせるというですね、そういう個性的な高貴なる精神というものをつくっていくことはできません。これが深く屈伸しなければ高く飛び上がれないという、そういうことを原理にしながらですね、個性ある自分をつくる方法論であります。**

**日本の文化を考えてもですね、日本の文化の高度なですね、この繊細な感性に基づく高度な文化というのは、どういうふうにして、そういう力がですね、つくられてきたのかということをこう探っていきますと、やはりこの中世の仏教という、そういうこの宗教的な精神ですべての人々が生活しておった。その時代にその根源があるということは、わかってくるわけですね。平安時代はですね、日本の中世といわれるわけですけども、その時代にですね、ご承知のように、世界最高の恋愛文学、いまだに『源氏物語』を超える恋愛文学はないといわれるぐらいですね、この壮大な、物語で、壮大なこの規模を持ったね、物語がね、展開されてですね、あれほどの多くの登場人物がですね、それぞれ個性的に輝きながらですね、非常にそのまたバラエティー豊かな愛の世界をそれぞれに表現しておるという、その光源氏は１人でも、それと関わるさまざまな女性がですね、本当に個々独特のね、愛の形をこう表現しておってですね、これほど多様な愛の世界というものを表現し、見せた恋愛文学はいまだにないんですね。だから、現在もやっぱり、『源氏物語』は世界最高の恋愛物語と、こう、いわれるわけですよね。**

**なんでああいう、この深い、この愛の世界の新描写というのができたのか。そこにはやっぱり、人間の自分自身の心の奥底というものを深くのぞき見ることによってですね、多くの人の心の、内面というものをですね、理解する力ができていってですね、そして、ああいう文学というものを表現する力が宿ったんだというふうに言わなければならない。そういうこの深く、その人間の内心をのぞき込んでですね、心理を表現する、そういう描写ができる力をどうしてつくってきたのかといったら、日本人独特の短歌、和歌の世界ですね。この和歌というのは、『古今集』の序文にも書いてあるようにですね、『古今集』の序文の書き出しの言葉がですね、「やまとうたは人の心を種として万の言の葉とぞなれりけり」という言葉から始まってるんですね。「やまとうた」というのは、短歌、和歌のことですね。和歌という、この短歌、５、７、５、７、７でつくられるこの短歌というのは、「心を種として万の言の葉とぞなれりけり」。すなわち、自らの内心という、この心を見つめ尽くすことによってですね、それをどう言葉で表現したならば、その心は的確に、この表れ出るかですね、そういうこの作業を積み重ねていくことによってですね、日本人は、この他の民族に類を見ない繊細な感性、心の深さというものを獲得した民族であります。**

**そして、この日本人のですね、短歌によって鍛えられた、この繊細な感性がですね、今、日本民族の民族の特性としてのですね、あらゆるものを最高の完成度に仕上げてしまうという、高いこの技術力を支えておるわけですね。日本民族は、世界のどこでできたものでも、日本に入ってくれば、たちまちにしてそれをつくった、それを創造した本国のですね、能力をたちまちに抜いてしまってですね、そのものの最高のあり方、最高の姿というものを現出させてしまう。あらゆるものを世界最高の完成度、世界最高の厳密なですね、そのあり方に仕上げてしまう。そういうこの、どんなものでも、その質においてですね、これ以上、この素晴らしい質のあり方はないというところまでですね、持っていってしまう。もうそういう能力を日本人は持っておるわけですよね。奈良時代でも、中国やですね、朝鮮半島から入ってきたさまざまな文化がありますけど、日本に入ってくると、それが天平、白鳳の文化といって、まさにあらゆるものが芸術となってですね、輝き始める。またその平安時代に中国から入ってきた寝殿造りでも、本国の中国における寝殿造りはそう大した芸術品といわれるほどのもんじゃない。非常に粗雑な建物だった。だけど、日本に入ってくると、その寝殿造りが国風化されてしまってですね、国風化っちゅうことは、それは日本民族の手によって磨かれていくのが国風化なんですね。国風化されると、たちまちにして寝殿造りはですね、一点の非の打ちどころもないといわれるぐらいのですね、見事な建築様式と、そして庭造りというものを持ったですね、本当にもう世界に類を見ない構造の、そういうこの美しい庭を伴った建築がこう、できてくるわけですね。**

**とにかくもう、ご承知のように、自動車でもね、今はもう日本が最高だと。その時計でも、カメラでもですね、家電でも、日本、メード・イン・ジャパンは信頼できると。長持ちして故障が少ないと。もうとにかくそういう、このいろんなものを、その質において、最高の完成度に仕上げてしまう。ここに、この日本の民族としてのですね、独特のこの能力の光があるわけですね、輝きがある。これが短歌というものをつくるですね、そういうこの習慣というものが積み重ねられることによってつくられていったんですね。結果として、文学においても、最高の恋愛文学としての『源氏物語』ができると。そういうこの積み重ねの中でですね、その鎌倉時代に入っていくと、突如、この日本民族の魂が形を持ってですね、この輝き始めるような、独特のこの日本文化がこう創造されることになってくる。平安時代までは、外来の文化を受け入れてですね、そして、それを磨き上げるということだけだったんですけど、鎌倉時代に入ることによって、日本民族の魂が噴出していってですね、そして、日本にしかない独特の文化というものがつくられることになったわけですね。**

**ご承知のように、鎌倉時代になると、突然、その日本仏教というようなものができてきてですね、親鸞、法然、日蓮、それから、道元、いろんなですね、その独特の個性的なですね、その資質を持った僧侶が、それまでになかった高度な仏典解釈をですね、持った、独特のこの宗教というものを、つくり出しました。また建築でも、書院造りといわれるようなですね、後々の、茶室の原形になるような、簡素な美学というですね、独特の日本精神を表現した、簡素な美学を象徴する書院造りという建築形式ができました。また、仏師でもですね、運慶、快慶といわれるような、独特の繊細な技術を持った仏師が生まれてきてですね、そして、この芸術作品としての仏像をたくさんつくりました。刀剣でも、世界中にですね、芸術作品といわれる刀剣は日本にしかない。人を斬るための刀じゃなくってですね、まさに鑑賞して眺めることによって、人間の心に影響を与えるというかですね、そういう、ただ刀をこう、ちらっちらっとこう、表裏、返しながら見てるだけで心が洗われる。心が研ぎ澄まされる。自分の心が、それだけで鍛えられてしまうようなですね、そういう見事なですね、独特の反りと、独特の刃形を持った、まさに芸術作品としての刀剣がつくられることになってきたと。**

**やがて、その鎌倉から平安時代、鎌倉から室町に至ることによってね、わびとか、さびとか、幽玄といわれるような、もう本当に独特の日本民族の魂がですね、かたちを持って表現された。何故にこの鎌倉時代に至って、突如そういう日本民族の魂の表現といわれるようなですね、そういうこのことが、そういう文化が沸き起こってきたのか。それは、平安時代においてですね、民族の根源である魂に触れるところまでですね、日本民族は自ら内心をのぞき込むという作業をした。そして、民族の魂に届くところまで、自分自身を掘り下げ、そして、それを見つめていく、見つめ尽くすという、そういう作業をしたが故にですね、その魂の根源にまで、その努力がたどり着いたが故に、そこから湧き上がるというかですね、そこから押しとどめることができないほどの湧き上がる力をもって、民族の魂が、この噴出してきて、そして、独特の日本文化というものの原形を鎌倉時代から室町にかけてつくったという、そういうことになったわけですね。**

**これもやっぱり、内心を掘り下げる努力をしなければね、民族の個性は生まれないということを結果として教えてくれてる、表現してるわけであります。だから、われわれも、自分の個性というものを輝かせようと思ったならばですね、やっぱり、自らの内心を深く掘り下げていくことによって、自分自身の魂に触れるという、そういうところまで自分を見つめ尽くすという作業をですね、しなければ、本当に自分というものを価値あるものとして輝かせることはできない。そういうことをですね、われわれは歴史を振り返ることによって、知ることができるわけであります。いかに人格の高さをつくるためにもね、この深さというものをつくる努力というものが、また原理的に大事だということがいえるわけですね。**

**実際問題、この人格の構造は、構造としては、高さ、深さ、大きさという３つに分かれてますけども、だけども、その人の人格というのは、決してそういう、この分析的にですね、分けて言うことができるようなもんじゃなくって、その人の人格の高さ、深さ、大きさというものが有機的に絡み合って、その人の人格を表現しますので、具体的には分析してしまうこともできないような、そういうこの生きた姿を持ってるわけですね。だから、当然のことながら、人格の高さにおいてもですね、深さと大きさがそれに関係して、高さを表現しますし、また人格の深さといってもですね、その人の人格の高さと大きさをつくる努力がどの程度かということがですね、また人格の深さを表現するためにも関わってくるわけであります。また人格の大きさというものも、それ単独じゃなくてですね、人格の高さや深さをつくる努力というものは、当然、その人の人間の大きさというものを表現するための土台というか、支える力としてですね、働いてる。それが有機性というものなんですね。その意味でですね、この深さをつくるという努力が、いかに人格の高さ、個性としてのですね、この高度な存在感と輝きというものをつくるために、深さをつくる努力が必要なのかということもですね、併せて、知っておいてもらいたいと思います。**

**歴史を学ぶということは、まさに人生を学ぶことなんですね。歴史が単に過去のですね、事実を知ることで終わってしまったら、そんなものは価値がない。ただの知識だ。だけど、歴史というものは、現実的には、この人間の命を懸けた生き様がそこにあるわけですからね。歴史こそ、まさに人生最大のこの教科書、教訓のですね、宝庫というふうにいわなければならない。歴史からどういうふうにして自分のこの生きる力というものをですね、くみ取るかということが、歴史を学ぶという現実に生きる人間が、現代に生きる人間が、歴史を学ぶということの、意味であるというふうに言うことができるわけであります。とにかく、くどくどと申しましたけども、この人類の人間性に深さというですね、そういうこの価値が生み出されたのは、宗教支配の時代であったと。超越的なる存在というものを意識しながら生きることによって、自分のですね、至らなさみたいなことをですね、この反省する。そういうこの心がですね、どんどん、どんどん、この自分というものを自覚させる、わからせる。自分というものをこう、しっかりとつかまえる。そういうふうなですね、この結果をもたらしてくれたわけですね。**

**その意味では、やっぱり、人間は人間らしい人間になろうと思ったら、宗教を持たなければならない。人間は宗教なしには、人格というものを形成し得ない。これもまた歴史が教えてくれるところであります。人間が人間としての格を持ち得る根本にですね、この原始宗教を創造したという事実がある。原始宗教を創造することによって、われわれは人間に人間の格というものをつくり出すような、そういうこの道筋をつくることができたんですね。どういう宗教を持つかは個々の自由でありますけれども、いわゆる宗教心なしには、人間は人間たり得ないというね、そういうことが、人類史を振り返ることによってわかってくることであります。超越的なる存在というものを意識することなしには、人間は自分とはなんなのかを知ることができない。それは、自分自身の命がですね、原理的にいって、自分を超えた、人間を超えた、超越的存在によってつくり出されたものなんですよね。**

**科学的に言えば、人間は宇宙の摂理によってつくり出されたものだ。宇宙は母なる命であり、われわれは子なる命である。この生命連関は断ち切ることのできない、この根源的なものとしてですね、人類が存在する限り、それはあるわけであって、その宇宙と自分とのつながりというものをですね、意識することなしには、自分とはなんなのかということを原理的、根源的に理解することはできません。宇宙に目覚めることが、宇宙とのつながり目覚めることが、永遠の生命に目覚めることが、全世界、どこの国に行っても、それが悟りなんですよね。ヨーガにおいても、座禅においても、瞑想においても、結局それはいったい何を目的にしてるのか。それは自分の命の中に働いておる宇宙、自分の命を生かしめ、また支えてくれておる宇宙の力というものをですね、自分が感じ、それに目覚めることが悟りなんですよね。宇宙との一体感。永遠の生命が俺なんだということに目覚めた時、悟ったとこういわれるわけであります。その意味で、人間が人間としてのですね、価値を持った生き方をしようと思ったならば、必然的に事実として宇宙とつながっておるこの命のあり方というものをですね、見つめる以外に、人間が本物の人間になり、自分というものが、この宇宙によってつくり出された存在にふさわしいですね、正しい命のあり方というものを自覚しつくっていく方法はないんですね。**

**とにかく、この人間というのは、なんらかの意味で宗教心と関わらなければ、本物にはならない。そのことがですね、歴史を振り返ればわかるわけであります。宗教と関わることによって、自分とはなんなのかということがちゃんとわかってきて、それを通して人間性の深さというものが形成されていくということにもなるわけですね。深さというのは、自らの内心をのぞき込む、内省や自省の目である。それがこの積み重ねられていくことによって、自分自身が深いということを人に感じさせることができるようなですね、人格の輝きというものを持つことができます。その自らの内心をのぞき込むという力をつくっていくためには、外に向かっておる目を内心に、この向けさせるというですね、そういうこのきっかけがなければならない。**

**じゃあ、われわれの人生においてですね、外に向かっておる目を自らの内心をのぞき込むという、そういう目に転換させるきっかけはなんなのか。それは、人間においては、物事がうまくいってる間はね、絶対に反省はしません。物事がうまくいってる間は、目は外に向きっぱなしです。だから、軽薄で終わってしまう。外に向かっておる目が自分の内心をのぞき込むというきっかけを持つことができるチャンスは、大きな悩みにぶつかる。大きな問題にぶつかる。大きな苦しみにぶつかる。あるいはスランプに陥る。失敗をする。病気になる。犯罪を犯す。そういうこの大きなですね、この自分にとって不幸と思われるような、そういうこの現象にですね、自分が人生でぶつかる。その時、われわれは、この自分の内面にその目を、意識を向けてですね、そして、反省するというか、この自分自身をこう省みるという、そういうふうな、この機会、チャンスを獲得するわけであります。**

**そういうふうにですね、考えていくならばですね、この人格になくてはならない深さというものをつくっていくためには、われわれは、何回か人生において、悩みにぶつからなければならない。苦しみにぶつからなければならない。あるいは、忍耐をしなければならない。スランプに陥って、苦しい努力をしなければならない。そのことがですね、わかってくるわけであります。すなわち、苦労を避けて、悩みを避けて、安逸をむさぼる。易きに流れる人生を生きておったのでは、永遠に深さなんて関係のない世界だ。われわれは、悩みや苦しみや、そういうこの問題にぶつかってですね、なおかつ、それを乗り越えていこうとする。その努力の中で、初めて自分の魂に深さというですね、そういう輝きが生まれてくるんだ。そのことを、忘れてはならない。ですから、どうしたら深さというものがですね、できてくるのかというと、高さということをですね、申し上げる時に、どういうことを申し上げたかというと、人格の高さというものは、その人が生まれてから今日までに獲得してきた、知識と技術と教養の量に関係するということを申し上げましたけども、それと対を成して、深さというのはどういうふうに表現するべきなのかといったらですね、この人格の深さというものは、その人間が生まれてから今日までに体験してきた深さ、体験が大事なんですね。体験がなかったら、深さはできません。その人間が生まれてから今日までに体験してきた苦労と悩みと努力の質に関係する。人格の深さというものは、その人間が生まれてから今日までに体験してきた、苦労と悩みと努力の質に関係するというふうに、言うことができるわけであります。**

**苦労や、悩みや、問題や、苦しみや、努力という、そういうですね、このことを積み重ねていくことなしにはですね、深さというものは、決してでき難い。だけども、もう最後に関係するという言葉が出てきますよね。深さというのは、その人間が生まれてから今日までに体験してきた、苦労と、悩みと、努力の質に関係する。関係するって、どういうことなのかといったら、苦労をしたから深くなるわけじゃない。努力をすれば深くなるわけじゃない。悩んだら深くなるわけではない。どういうこの悩み方をするか。どういう苦労にぶつかるか。どういう苦労の仕方をするか。どういう努力の仕方をするか。この苦労と悩みと努力の質というものがですね、深さができるか、できないかを決定する、この鍵であります。苦労しても、全然、深くならないでですね、苦労することによって、その苦労に負けてしまって、そして、この堕落していく人間もたくさんおります。だけども、中には苦労することによって、命を輝かせる、人格に輝きが出てきて、深いなというふうにね、感じさせる人間が、またそこから出てくるわけだ。その両極端のですね、相異なる方向性というものを決定する。そこに何があるのかということをわれわれは見つめていかなければならない。**

**苦労にぶつかって落ちぶれてしまう人間と、苦労をてこにして輝きを増していく人間とはどこが違うのか。それが非常に人生においては重要な問題になるわけですね。だけども、とにかく深さというものができてくるためにはですね、われわれは命に痛みを感じるようなですね、そういうこの体験というものがですね、この要求されてくる。この苦労の質というのはいったいどういうことなのかということなんですね。これはその深さというのは、木で言えば根っこの部分。高さというのは、木で言えば幹の部分というふうに、言うことができます。幹の部分というのは、地面から上に出ておるもんですからね、だから、これはある意味で、ビジュアルな、目に見える部分で、量的に量ることができる。だけども、この深さというのは、木の根っこの部分であって、直接的には目で見ることはできない、アンビジュアルな、質的な領域なんですね。この木の根でもですね、この成長して伸びていったならば、どっかでその木の根はね、地面の中にある大きな石、岩盤とぶつかる時が来るんですね。**

**木の根であればですね、その岩盤にぶつかった時にね、その岩盤にぶつかった時に、その岩盤を避けて、木の根であればこう曲がっていってですね、曲がっていきながら伸びていってもいいんですけども、だけど、人間が大きな問題や悩みや苦しみにぶつかった時にですね、その問題、悩み、苦しみを避けて通ろうとすると、人間だとですね、この根性が曲がるの、根性が。木の根で言えば、曲がっていったってべつに差し支えないんです。人間がその問題、苦しみ、悩みにぶつかって、それを避けて通ろうとすると、根性曲がりになってしまう。根性が曲がるんですね。これがちょっと困りもんなんですよ。根性が曲がるとね、物事がまともに見えなくなってしまって、曲がった解釈、曲がった見方しかできなくなってしまうんですね、根性が曲がると。正常なものの見方っちゅうのはできなくなってしまうんですね。反社会的なものの解釈、マイナスの解釈、否定的な解釈、そういうものにね、陥ってしまって、普通の健康な常識的な人間の解釈とは違ってきて、あらゆる意味で対立するというですね、そういう状況になって、結局、その反社会的な行動を取って、犯罪を犯してしまったりですね。あるいは、ぐれてしまったりして、この健全な、健康な生き方ができなくなってしまう。**

**これが、この問題にぶつかって、その問題から逃げるというね、そういう結果、根性が曲がった人間の姿であって、その人はもう決して社会において成功を勝ち取ることはできません。また人生においても、健康な生き方をすることはできません。また、決して幸せにはなり得ません。結局、この不運を嘆きながらね、落ちぶれていく人生というものを歩む以外にない。これが残念ながら、そういうこの問題、悩みにぶつかって、そして、それを避けて通ろうとして、逃げるというね、そういうこの対応の仕方をしてしまった結果、根性が曲がってしまった人間の人生の行く末であります。**

**だけどもですね、じゃあ、その大きな問題、悩みにぶつかってですね、それを避けて通ったら、問題はなくなるのか、悩みはなくなるのか、苦労はないのか、助かるのかっていったら、そうではない。人生というのはですね、問題を避けて通ろうと思えば思うほど、ますますその問題は、より多く自分の肩にずっしりのし掛かってくる。悩みを避けて、そこから逃げれば逃げるほど、ますます悩みはより重くなって、自分にのし掛かってくる。人生の苦労は、逃げても逃げられない。追っ掛けてきて、ますます嫌さが増してくる。ますますつらさが増してくる。これが人生なんですね。だから、仏教では、人生逃げ場なしといってですね、逃げたって逃げ切れない。逃げようとすればするほど、ますますつらくなってくる。ますます嫌になってくる。ますます苦しくなってくる。人生の苦労は逃げても逃げられんのだというんですよね。**

**実際問題、勉強が嫌いだとかですね、がみがみ言われるからといって、家庭から逃げ、学校から逃げてね、族になっちゃったとしてもですね、族になっても、やっぱり、下っ端じゃあね、しょっちゅう、使いぱしりでですよ、あれこれ命令されて、そして、その奴隷のごとく支配されてしまうのが族の世界ですからね。やっぱり、この族になってもですね、自分がいい気分で生きていこうと思ったら、やっぱり頭にならんといかんと。その下っ端から頭になろうと思ったら、どっかでそのつらさを乗り越えてね、そして、その仲間から一目置かれる力というのを自分が見せないと、頭にはしてくれませんからね。どっかで逃げんというですね、そういう生き様をすること以外にのし上がる道はないんですよね。とにかく逃げれば逃げるほど、ますますつらくなる。逃げれば逃げるほど、ますます苦しくなる。これが人生だ。逃げて助かるもんじゃない。ということは、逃げても苦労なんですね。逃げても苦労はなくならないんですね、人生は。どんどん苦労が増してくるんですね。ただ、その苦労が増すだけじゃなくて、逃げれば逃げるほどね、ますます、もう、なんでこんなに嫌なことばっかり起こるんやっちゅうぐらいね、どんどん、どんどんね、嫌なことや苦労が、また新たに出てくるんですよ。もうどうしようもなくなってしまって、追い詰められてしまってね、それでどんどん、どんどん、落ちぶれていくんですね。最後には、逃げ切ったら、ついにはホームレスになる。最後はもう。もうそれで、なおかつ逃げようと思ったら、あとは死ぬっきゃないことになりますからね。**

**人生で何かしら、幸せ、健康、成功ということを求めていこうとするならばね、そういうこの問題、苦労、悩みを避けるという、そういうこの生き方をして、結果として、自分の根性が曲がってしまうということになってしまうような、そういうこの人生、そういう生き方をしてはならないと。だけど、その問題にぶつかっていっても、やっぱり苦労なんですね。逃げても苦労なんですね。ということは、いったいどういうことなのかといったらね、逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労なんだからね、逃げて苦労したら、もう完全にこれは、人生の堕落の道をこう歩むことになるんですから、逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労やったら、同じ苦労するんやったら、ぶつかっていかなきゃ損、損というと、なんとなく阿波踊りを踊ってるみたいな感じになりますけども、とにかく逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労、同じ苦労するんなら、ぶつかっていかなきゃ損、損というね、そういうこの踊るあほうと見るあほう、同じあほなら踊らな損、損でですね、やっぱりこのぶつかっていって苦労するという、そういうこの生き方をしないとね、この人生の本道というものを歩んでですね、深さというものをつくっていく質の良い苦労の仕方というのはできないと。**

**ぶつかっていって苦労するのは、質の良い苦労。逃げて苦労なのは、質の悪い苦労。質の悪い苦労をすればですね、人生の敗残者になる以外にないと。ぶつかっていって苦労するという、この健全なですね、健康な苦労の仕方を選ぶ以外にですね、人生を生きる道はないんだ。そのことをまず、われわれは生き方としてですね、この悟らなければならない。とにかく、皆さん方も何度か体験されてると思いますけど、逃げれば逃げるほど、ますます嫌になるんだ。とにかく人生は。逃げようと思ったら、ますますつらくなるんですよ。逃げられない。追っ掛けてくるんだ。それで、その逃げるという気持ちが、ますますね、ますますですね、このあれなんですね。このつらいことや、嫌なことを引き寄せるんですね。ますますこう、立ち上がれなくしてしまうんですよ。**

**私もそういう、この逃げて、もうどうしようもなくなってしまったという体験が何度もあるんですけどね、だけど、その時に逃げてないで、もう逃げ切れんと。俺が選んだ道やないかと。もう、もうこれ以上、逃げたら、もう俺は死ぬっきゃないと。そやけども、子どもがおるからですね、そう簡単に死んでしまって、自分の人生の責任を果たさないわけにはいかないと。そういう状況で、もう逃げられん。もう逃げられん。俺がなんとかするっきゃないと。俺がなんとかするっきゃないと思ってですね、ぐっと踏ん張って立ち止まって、なんとかせんないかんと思って、もう逃げられんと思った瞬間にね、それまで嫌だ、嫌だと思った嫌さがね、ふっと半分に減ってしまうんですよ。これはもう、そういうことを体験した人はみんな異口同音にそれは言いますね。逃げとる間は、ものすごいつらかった。もう逃げられんと思って、なんとかせないかんと思った瞬間に、嫌さが半分に減って、なんとかしようと思ったら、何か乗り越えられそうというね、力が湧いてくる。これはもう誰もが体験する人生の道筋なんですね。**

**これがいわゆるね、いわゆる火事場のばか力っちゅうやつなんですよ。火事になってね、その大事なものが書類箱に入っておると。あれを燃やしてしまったら、俺の財産、パーやとなってしまったらですね、その書類箱っちゅうか、金庫でもね、相当重たくて、平素はそんな１人で持てるような重さやない。だけども、どうしてもこれをなくしたら、もう俺の人生は、パーやということになってしまってですね、なんとかせんないかんと思って、必死になってうっかり持ってしまったりしてね、持ったままで走っちゃったりして、外に付いて、どんとそれを置いた瞬間に、なんでこんなものを持てたんだと思ってしまうようなね、そういうことになってくると。そういう底力がこう、湧いてくるんですね。もう逃げられん。なんとかせないかんと思うと、底力が湧いてくる。これがこう、人間という命が持っておるね、この底力の偉大さというかですね、素晴らしさというか、大事なところなんですよね。逃げておったら、その力は出てこない。逃げられんと思ったら、その力が湧いてくる。これが、潜在能力が出てくるとかね、そういうこのことの、基本原理であります。**

**企業経営の場合でも、あるいは仕事の中でもね、今、自分の持ってる力で、このできることしかしようとしない。今、自分の持ってる力でできないことは、ちょっと無理です。できませんといって断っておったんじゃ、自分の力は伸びないんですよね。だけども、今、自分が持ってる力ではできないけども、だけど、それもできる自分になろう。それもできる会社にしていこう。そういうふうにこう、努力した時にですね、潜在能力は初めて出てくるというね、そういうこの構造が命にできるわけであります。これが逃げないというですね、そういうこの生き方が、自分につくってくれる成長なんですね。とにかく逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労なんですからね。そこで、この深さというものをですね、つくっていくために、一番大事なこの人生の鉄則、生き方はなんなのか。これはもう逃げへんぞということですね。逃げない。向かっていく。これ以上、また大事なですね、人生の鉄則はありません。**

**だけど、ついついやっぱり、苦労とか、問題、悩みにぶつかればね、やっぱり楽をしたい。そんな苦労をしたい人間はいませんから、ついつい楽をしたい。ついつい、それを避けて通ろうと思うんですね。それが自分の人生を崩してしまう、台無しにしてしまうきっかけなんですからね。ぜひ皆さん方もですね、そういうこの家庭の悩みでも、職場の悩みでもね、大きな悩み、苦しみ、つらいことにぶつかった時にはね、ぜひ自分が自分に対してね、自分が自分に対してね、おまえ、逃げるんかとこう、聞いてください。自分が自分に、おまえ、逃げるんか。逃げるんかっちゅうて聞かれて、逃げとったら卑怯と思いますからね。逃げるんかって言われたら、逃げられなくなってしまって、いや、逃げへんとこう、言わざるを得なくなってきて、乗り越えていくという気迫が出てくるわけですね。もう本当にね、人生、惰性に流されておったら、もう無自覚的に生きておったならばね、本当にこう、ついうっかり避けて通るというね、逃げるということをしてしまってる場合が多いですよ。その時にですね、それは結局、自分を堕落させる道だということをですね、知ってもらってですね、そして、逃げたいという気分が出てきたならば、この自分で自分に対してね、おまえ、逃げるんかと。いや、逃げへん。逃げへんぞと、こう、そういう気持ちをね、つくるという、そういう生き方をぜひやってもらいたい。これが深さというものをね、つくっていく第１原則です。**

**苦労、問題、悩みから逃げない。向かっていくと。それ以外にないんですよ、人生は。なんでかといったら、成長するためにも、成功するためにも、成長した人間や、成功した人間は、なんで成長したのか、成功したのか、それは問題から逃げなかったからだけなんですよ。悩みから逃げなかったんですよ。その悩みや問題から逃げたら、その人には、その先の成功と成長はもうないんですね。成功した人間は、問題を乗り越え続けた人だけなんですよ。成長した人間は、問題、悩みを乗り越えた人だけなんですよ。だけど、そんなことは当たり前のことでね、おぎゃあと生まれた瞬間から、人間は常に、今できないことをできるようにしていくという生き方をずっと続けてきたんですよね。這えば立て、立てば歩めの親心なんていうようなことを言ってですね、次々と、今できないことに挑戦させられながら、ここまで成長してきたんですよ。人生そのものが、この逃げないという、そういうこの気迫をね、つくってくれるプロセスなんですね。だけど、自覚的に生きてないから、それがわからないだけの話なんだ。**

**高さのところでもですね、申し上げたようにですね、このより高度で、より厳密なですね、その知識を獲得するという努力をさせてもらうというか、そういうことを学校でさせてもらう。それはいったいなんの意味があるのか。ただ漫然と勉強しておったんじゃ、それはわかりません。だけども、それは自覚を持って、勉強するという姿勢になった時ですね、より高度な問題が解けるように、毎年、挑戦させられていくのは、これは自分の命の中にどこまでもより高度なものを求めていきたいという価値への情熱を自分の命に呼び覚まし、それを植え付けてくれるために、これが、こういうことがさせてもらってる、やらされてるんだという思いを持ってやったら、そういうどこまでも高度なもの、どこまでも厳密なもの、どこまでも真実なるものを求め続けるという、そういうこの命を輝かせ、命を燃やせるような生き様ができる人間になるわけですよね。**

**それと同じように、学校でですね、去年までできなかった問題に挑戦させられてですよ、そして、できませんと言えないような状況で、それやらんかったら、進級できへんぞって言われてですね、それに挑戦させる。なんでや。なんでそんなことさせられるんや。それは人生において、これほど大事な原理はない。逃げたらいかんぞと。向かっていけよというですね、逃げたらいかん、向かっていくという気迫をつくってくれるためにですね、そういうこの今の力でできないような問題に挑戦させてもらって、そして、逃げない、向かっていくという気迫でそれを乗り越えていく。それをさせてもらうことによってですね、本当はその子の中に人生というものを生きる姿勢をつくってあげようという、教育学的配慮がその中にあるわけであります。だけど、誰もそんなことを、そういうこの意味がね、あって、そんなことをさせられてるんだと思ってない。だから、できない。また教えてる先生のほうもね、この子に問題を、この今の力でできない問題を与えて挑戦させるっちゅうことは、この子にですね、逃げへんぞ、向かっていくんやという、そういうこの気迫をつくってあげるために、これをしとるんやという自覚で教えてませんからね。だから、いくら勉強しても、そういうこの向かっていく、逃げないという、この気持ちの素晴らしさというものがですね、子どもの中にできないっちゅうか、わからないんですよね。**

**だけど、本当に人生においては、この逃げない、逃げへんぞ、向かっていくという気迫ほどね、また大事なものはないですね。私の人生なんか考えてもですね、あん時、あの課題から、あの問題から逃げとったら、もう俺の今日はないと。そういうことは、いっぱいこう、過去を思い出せばある。あれから逃げとったら、もうあそこで俺はつぶれとったなと。あん時、あの課題を与えられてですね、それでその努力せんとですよ、ちょっと難しいからといって、それを避けて通るような、そういうこの弱気になっとったら、もう今の俺の人生はなかったなと。そんなことばっかりなんですよ。だからもう、私でもですね、この自分の人生を振り返ればね、なんでここまで来れたんや。俺はもう逃げへん。向かっていく一本でね、やってきたからやと言っても過言ではないほどのですね、重要な原理ですね。とにかくできない問題が出てきたら、それもできる自分になったろうやないかと。そういうこの気持ちでですね、この問題、課題にぶつかっていくということを、やっぱり、しないとですね、自分の命を輝かせる人生というものはつくっていけないですよね。**

**とにかく深さをつくる上で、逃げへん、向かっていく。逃げたらいかん。向かっていく。これほどですね、大事な人生教訓はないと思います。だけども、多くの場合、家庭でもね、職場でも、これは俺の仕事やないと。おまえの責任やないか。俺は知らんといってですね、他人にそういう問題を押し付けようとするような、そういうこの責任転嫁としてね、逃げるという、そういうこの気持ちを持ってる人は非常に多いですよ。だけど、やっぱり、この仕事を通してですね、自分を成長させていく。仕事を通して自分の人生をですね、よりこの生きがいのあるね、この素晴らしいものにしていこうと思ったら、他人ができんことでもですね、俺に任せておけと。俺がなんとかしたる。そういう思いでね、かえって自分の責任でないことでもですね、自分に関わってることであったならばね、俺がなんとかしたろうやないかっちゅうて、向かっていくという、そういうこの努力をすればね、その組織の中では輝いていきます。みんなに信頼されて、そして、この頼られて、自分で出世せんと、自分で出世しようと思わなくても、みんなが押し上げてくれて、出世していくというね、そういう出世の本道を歩むことができます。**

**組織の中でも、人のために役に立って、そして自分がうれしいというね、そういう気持ちは非常に大事です。単にお客さんの役に立てりゃいいという話だけじゃない。やっぱり組織で働いてるんですから、お客さんにも役だって喜んでもらわないかんけど、一緒に仕事をしてる仲間にも、役に立って喜んでもらえるという自分をつくっていかないと、この組織人としては、面白い、愉快な生き方ができませんからね。だけども、やっぱり人間は不完全ですからね、どんな問題を抱えても逃げたらいかんと考えてはいけない。やっぱり自分の力には、ある意味で限界がある。あんまり無理したらいかん。無理したらつぶれますからね。少しずつ力を蓄えながら、成長させていくという道筋を歩んでいかないと、あんまりいっぺんに無理をしたら、自分がつぶされますからね。つぶれちゃっちゃ、また周りに迷惑を掛けますから、なんにもならない。逃げないという、そういうこの力と、逃げないという生き方の素晴らしさというものを自分が感じながら、自分を成長させていこうと思ったらですね、今の自分の力にふさわしい、努力の仕方というものをですね、ある程度、考えなきゃいけません。**

**だけど、原理的にはですね、どういうことが言えるかというと、人生には、逃げなければならない問題もある。人生には、逃げてもいい問題もある。だけども、絶対逃げたらいかんというのは、いったいどういう道かといったらですね、自分の意志と決断で、自分の意志と決断で選び取った人生の道筋から、必然的に出てくるような問題と悩みと苦しみは、絶対逃げたらいかん。自分で選んだ道から出てくる問題なんや。逃げてどうするんや。自分が選んだ道から出てくる問題。それこそ、おまえがやらんで誰がやるんやという問題なんですよね。他人に代わってもらうわけにいかん問題だ。だから、自分の意志と決断で選んだ道筋から出てくる問題、就職とかね、結婚とかね、そういうこの自分の決断で選んだ道から出てくる問題は、絶対逃げるという弱気になったらいかん。どんな問題が出てきてもね、とにかくは、俺に任せとけと。俺がなんとかしたるっちゅうてですね、乗り越えていかないかん問題なんですね。自分が選んだ道から出てくる問題、苦労から逃げることは、これは人間として卑怯である。卑怯である以上に、もっと大事なことは、今、自分が歩いておる道から出てくる問題というのは、こういう問題や悩みを乗り越える力をつくっていかんと、君はこの道では成功できませんよ。この道では幸せになれませんよ。君が幸せになり、成功するためには、こういう問題を乗り越える力をつくっていきなさいよといってですね、天が与えてくれた問題、それが自分が選んだ道から出てくる問題、悩みということの意味なんですよね。**

**だから、自分が選んだ道から出てくる問題は、どんな問題であってもね、とにかくは、まず基本的な姿勢として、俺に任せとけと。俺がなんとかしたる。そう思わないかんと。とにかくは。俺に任せとけというのは、全部が全部、自分でやらないかんっちゅうわけじゃないんですよ。自分に任せとけといってですね、そして、自分があれこれ考えて、こういうことは、あの人に相談したらええかもしれんな。こういうことは、こういう本を読んだらええかもしらんな。こういうことは、こういう専門家にやってもろうたらええかもしれんな。自分自身で自分のその問題を乗り越えていく道を切り開いていくね、そういうことをするならば、誰に助けてもらってもいいんですよ。ただ、自分自身がそれを乗り越えていくという主体者になる。そういうこのことが大事であってですね、なんとかしてもらおうと、全部、お預けで、お任せというね、そういう責任転嫁、責任逃れということはやったらいかんと。助けてもらうことも大事なんですよ。だけど、それは自分で考えて助けてもらう人を選ぶ、選択する、決めるということをね、しなければ価値がない。**

**基本的には、とにかくはね、逃げなければならない問題もある。逃げてもいい問題もある。だけども、絶対逃げたらいかんのは、自分の意志と決断で選んだ道から出てくる問題、悩み、苦しみからは、絶対に逃げたらいかんと。自分が選んだ道から出てくる問題なんや。他人に代わってもらうわけにはいかん問題なんやと。俺が引き受けていく以外にない問題なんやと。俺がやらんで誰がやるんや。これは、俺っちゅうたら、男になりますけど、女性も同じなんですよ。私がやらんで誰がやるのと。私が選んだ道やない。私が選んだ道やないの。そこから出てくる問題は、どんな問題が出てきたって、私がなんとかしたるわ。任せといてっちゅうてですね、やっていかないかん。それが人間として生きる基本的なですね、生きる姿勢なんですよ。これ、一生持ち続けてないとね、それができないと、自分を不幸にしますよ。自分を惨めにしますよ。自分を弱くしますよ。**

**結局、幸福も不幸も自分でつくるもんですからね。外からやってくるもんじゃない。こんな環境だったからね、私はこうなっちゃったっていったら、自分は不幸になりますよね。だけど、あらゆる環境を自分の人生にプラスになるように解釈をしてですね、この問題が与えられたから、私は成長できるんだ。乗り越えたろうやないかというね、そういうこの普通なら不幸と思える環境すら、それを自分の成長の糧にしていくようなね、そういう解釈力というかですね、そういう力を持った時、自分で自分を幸せにできる。幸、不幸は自分が呼び寄せるんですね。運とか、運がいいとかね、ツキが付くとかね、あれも結局は、自分で呼び寄せるものなんですよ。運がいいとか、ツキのある人というのはですね、物事をプラスに、素晴らしく解釈する力を持ってるんですね。物事をマイナスに解釈する人は、自ら運とツキを離してしまうんですね。あらゆる事柄を自分の人生にとってプラスやと思えば、どんどん縁が多くなって、縁がまた太くなってですね、そして運とツキが付いてくるんですけどね。**

**だけど、いろんなことを自分にとってマイナスや、嫌なことやと思うと、どんどん、どんどん、縁が切れていって、そして、縁が細くなっていって、どんどんこのツキも運も離れていくんですね。運のいい、ツキの付く人間になろうと思ったならば、われわれは、あらゆる環境を自分の人生にプラスになるように解釈していく。そのためにも、逃げない、向かっていくというね、乗り越えていくという、自分を成長させるために出てきてる問題やないか。自分を成長させるために出てきてる悩みだ。悩みや問題がなかったら、人間は成長しない。悩みや問題があるから、新しい気付きを持ち、新しい能力が出てきて成長できるんやと。俺が選んだ道から出てくる問題やないか。逃げてどうするんやと。それを乗り越えていくことによってしか、自分の人生はつくれへん。それを乗り越えていくことによってしか、自分の実力はつくれない。それを乗り越えることによってしか、自分は成長できないんだ。逃げてどうするんやという気構えでいったら、どんどんね、運は向いてくる。運が向いてきて、ツキが付いてくる。どんどん物事がうまくいき始めてしまうんですよ。逃げないという気迫を持ってしまうと。**

**ぜひ皆さん方もね、この人生の生き方の極意というものをですね、ぜひこの忘れないで、それをしっかりつかんでおいてもらいたいと。逃げれば逃げるほど、ますますつらくなるんや。逃げたら堕落の道やと。向かっていくっきゃないんやと。自分が選んだ、自分が選んだ道から出てくる問題や悩みは、自分を成長させるために出てきてくれてるんや。逃げてどうするんや。自分が選んだ道から逃げるっちゅうことは、人間として卑怯や。決断を放棄して、責任を放棄することやと。これは人間として恥ずかしいことやと。だから、逃げたいという気分が出てきた時にですね、どうするかといったら、自分で自分に対して、おまえ、逃げるんか。聞いてください。逃げるんかっちゅうて、逃げますとは、なかなかこれね、言いづらい話ですから。逃げるんかって言われたら、いや、逃げへんと、こう、自分で言う以外になくなってきましてですね、それで、逃げないで向かっていくという気迫が、だんだん、だんだん、自分の中につくられてきますから。**

**逃げへんと思った瞬間にね、もう半分はその問題を乗り越えてるんですよ。逃げへんと思ってね、逃げるもんかと思ったらね、ふっとね、もう瞬間にね、つらさが半分に減るんですよ。もう逃げられんと。逃げてどうするんやと思うだけでね、つらさは半分に減りますよ、確実に。つらさが急に半分に減ったらね、必然的にね、あ、乗り越えちゃうかもしらんという気持ちがふと湧いてくるんですよ。それで乗り越えられてしまうんですよ。その人を成長させるために出てきた問題なんだからね、乗り越えられない問題は出てこないんですよ。逃げへんというふうに思ったら、必ず乗り越えられてしまうんですよ。必ずそうなるんですよ。乗り越えられない問題はないんですよ。自分の生き様ゆえに出てきた問題なんだから、自分が逃げへんかったら、全部乗り越えられてしまうんですよ。突然ね、降って湧いたようなね、その流星が地球にぶつかって気候が変わっちゃったとかね、そういう自分の意志ではなんともならんようなね、そういうこの問題は、これは駄目ですけどね。だけども、自分の生き様ゆえに出てきた問題は、全部乗り越えられるようになってるんですよ、構造的にいって。だから、人類のこれまでの生き様ゆえに出てきたね、自然破壊も環境破壊も人間性の破壊も、核廃棄物の問題も全部、これは乗り越えられるんですよ。乗り越えられへんと思ったら、乗り越えられませんけどね。乗り越えられるんやと思ってやったら、全部、乗り越えてしまうんです。それが歴史なんだ。**

**問題がなかったら、人類は成長しませんからね。だから、人類は問題をつくり出すような生き方をしてるんですよ。べつに問題をつくり出そうと思わんでも、自分が不完全ですからね。何かしたら、問題が出てきますから、べつに問題をつくり出そうと思う必要はないんですよ。なんかしたら、もう必然的に問題は出てくるんですから。またその問題を乗り越えていくことが、歴史をつくるという作業なんですよ。なんにも怖くない。問題のないことを願ったらいかん。問題があってこそ成長できる。これは大原則ですからね。問題が出てこないことを願ったら、それは逃げだ。経営からの逃げ、人生から逃げ、問題があって当然、なきゃおかしい。問題のない人生を望んではならない。悩みのない人生を望んではならない。そんなものはありようがない。必ずあるんだ。あるんだから、もうあとは、ばかになって、出てくる問題をしらみつぶしに乗り越えていくっきゃね、生きるという道はない。**

**経営とは、問題を乗り越え続けることなんだ。経営者が問題のないことを願い、経営者が問題の出てこないことを願い始めたら、それは楽をしようと思ってるんだ。安逸をむさぼる人生だ。易きに流れる人生。もうその会社は終わりだ。どんな問題が出てきたって、俺がなんとかしたる。俺に任せとけ。それは経営者のね、経営者魂であってですね、社員がどんな失策をしようともね、これは一瞬むかつきますけどね、だけど、俺がなんとかするっきゃ、その償いはできんと思ったらね、俺に任せておけと。なんとかしたるわといって、こう乗り越えていく。そしたら、絶大なる社員からの信頼が得られますからね。でも、これは単に経営者だけの問題じゃなくって、一人ひとりのね、人間の生き方として、逃げたらいかん、向かっていく。ぜひこの気迫をですね、持って、人生というものに臨んでもらいたいと思います。これは深さというものをね、つくっていく基本原理ですから。**

**じゃあ、ちょっとここで10分間、休憩を入れまして、続きを話しますけど、今までお話をしたことは、これは人間性、人格の深さをつくるための実践的原理なんですよね。そのあとにですね、今度は深さをつくるための精神的原理というものがありますので、後半の部分では、その深さをつくるための精神的原理というものをですね、お話をしながらですね、この深さというものを体系的に理解してもらえるように、この説明したいと思います。ほいじゃ、10分間、休憩します。**

**司会：全員座ったままで、姿勢を正して、ただいまより10分間の休憩に入ります。ありがとうございました。**

**一同：ありがとうございました。**

**芳村：ありがとうございました。**

**司会：解散。**

**一同：はい。**

**（休憩）**

**芳村：先ほどは、深さをつくるための実践的原理という角度からですね、お話をさせていただきましたので、今度は角度を変えてですね、この人格の深さをつくるための精神的原理という、そういう観点からですね、どういうこの努力、生き方をすればよいのかということをお話をしたいと思います。逃げたらいかんということはもちろん、これは非常に大事なですね、原則なんですけども、ただこう、逃げたらいかんぞっちゅうて、突っ立っておっただけでは、張り倒されてしまったら一巻の終わりですからね。大事なことは、逃げたらいかんという気持ちで何をするかですね。そして、実際問題は、その問題を乗り越えていかないと、深さという結果を出すことはできませんから、いくら逃げたらいかんっちゅうて、突っ立っておっても、問題を乗り越えられなければですね、深さという現実は生まれてきません。そこで、どうすれば、その問題を乗り越えることができるのかということが、次の課題になる。**

**この問題を感じるのは感性ですけども、問題を解決して、乗り越えていくのは理性ですからね。そこで今度は、理性の使い方ということが非常に大事になってくるわけですね。人間というのは、感性だけでは人間ではない。理性だけでは人間ではない。理性と感性が協力し合いながら、このつくり出す相乗効果の世界が人間という命であり、人生ですからね。とにかく問題を感じるのは感性である。感性が問題を感じなかったら、問題はあってもないんだ。感性が鈍ければ、問題はあるのに感じない。感性がいろんな規則に縛られですね、命令で動くという、そういうふうなこの会社や人間であったのでは、問題はあっても感じなくなってしまう。自分が問題を感じるためにはですね、この自分に縛られない自由がなかったならば、問題は感じません。そして、その問題を感じた時に初めて、われわれ自ら考えるということをするわけですね。自ら問題を感じない人間は自ら考えません。だから、命令されるまで待ってるんですね。命令されたらするけども、命令されなきゃ何もしない。これが死んだ人間の姿であります。自ら問題を感じなかったら、自らどうしようかと考えるはずはない。**

**問題は感性を感じるんだと。苦しみも悩みも感性は感じるんだ。そこでもがいて、なんとか必死になって自分で乗り越えていこうとして、自分の理性を働かせる。だけども、その感性の鈍い、もう感性が鈍いっちゅうことは、本当はないんですけども、だけども、その最初ちょっと問題を感じてもですね、問題が小さいもんですからね、多くの方はちょっと小さな間ぐらいの問題はですね、まあ、いいかで、こう、いってしまうんですね。それがどんどん、どんどん、放っておくことによってですね、その問題が重大になってきて、そして、最終的には大変だということになってしまうというのが、こう問題の成長なんですよね。だけど、問題というものは感性が感じるもんですから、感性が感じてる間に問題を乗り越える努力をしないと、理性が問題だと思ったらもう遅いんですよ。**

**これはもう、不良債権の問題でもそうですしね。日常生活でもですね、今日は、ちょっと胃の調子がおかしいけどなと思いながらも、まあ、いいか、やるかというんで、こういってしまうんですよね。そうすると、ついにはだんだん鈍くなっていってですね、最終的にはもう血を吐くところまでいってしまって、これは大変だということになったら、入院、手術ですよね。そうなったら、もう自分で自分の命の病を治すことはできない。自然治癒力の範囲を超えてしまうと。だけど、ちょっとなんか、今日、おかしいかなと思った時にね、ちょっとキャベジンでも飲んでおいたらね、それですっとこう、修正されてですよ、元の状態になるものを、まあ、いいかでいってしまうから、ついには大変なことになってしまうまで放っておくということになるわけですね。とにかく、問題というものは、早期発見、早期治療をしなければならない。気付いた時、すぐ対応するというね。**

**昔、役所でも、すぐやる課っていうね、課があったりしてね、市民から苦情が来たらすぐやるといって、そういうこの課ができた時があったんですよね。なかなか役所仕事っちゅうのは、いちいち文書をつくってね、ずっとその関連部署に回していって、いちいちはんこもらって、最終的にもういっぺん返ってきてからしか動けんというようなね、そういうことになってしまって、問題があって、このまま放っておいたら、この崖は崩れて、下の民家は大変なことになってしまうっちゅうのにですね、その工事するのに許可を取らないかんっちゅうて、ずっと書類を回してる間に台風が来てしまって、そして、死んじゃって、崖崩れで死んじゃったっちゅうようなことになってしまったようなこともね、昔はたくさんありました。そういうことがいかんっちゅうことになってですね、すぐやる課っちゅうのがこう、できたんですね。**

**とにかく、この問題というものは感性が感じるもんだ。感性が問題を感じてる間に処理しなければ、自然治癒力で治すっちゅうことはできない。少ない努力で、その問題を乗り越えていくっちゅうことはできない。理性がその問題だといってしまったら、もうその時は遅いというですね。そういうこの問題というものの、この性格というかですね、問題というものの、この意味をですね、ちゃんとわれわれは知りながら、会社の問題にも、人生の問題にも、生活の問題にも対応しなきゃなりません。感性が気付いた時がですね、その問題を乗り越える力を、出せるというかですね、自分の持ってる力で乗り越えられる時なのであって、その時を外してしまって、理性で問題だとわかったら、もう遅いというね。この問題を解決する時期というものをですね、やっぱりこれは、重大な問題として考えておく必要があります。**

**じゃあ、どういうふうにすればですね、その問題を乗り越えることができるのか。その問題を乗り越えるためにね、まずやっぱり必要なのは、逃げたらいかんという気迫なんですよ。なんでかといったら、逃げたいという気分があったらね、その分だけ、自分の底力は出てこないんですよ。また誰かに助けてもらおうというような、そういう依頼心があったならばね、その依頼心がある分だけ、また自分の底力は出てきません。逃げたいという、この逃げの心情や、依頼心という、助けてもらいたいという、そういうこの依頼心で、そういうこう、気持ちがあったらね、自分の力が出てこない。自分の持ってる底力が出てくるのを抑えてしまうんですね。これではやっぱり、その問題を乗り越えるということはできません。また逃げたいという気分があるとですね、今、自分の置かれてる状況が浅くしか見えないんですよ。逃げへんという、そういう気構えでですね、今、自分の置かれてる状況をねめ付ける、そういうこの強い眼力を持って、その問題と向き合わないとね、その問題を深く正しく捉えることはできません。**

**逃げたいという気分は、その意識が斜になってますから、はす交いになってますからね、また状況もゆがんで見えてしまいますしね。逃げたいという気分がある分だけ、状況を浅くしか読み取れません。その意味でもですね、理性で問題を解決しようと思ったならば、まずこの実践面において、逃げない、向かっていくという、この状況をねめ付ける眼力というものをですね、われわれは持って生きていないとですね、このいかに理性を働かせようとも、状況をゆがんでつかんでしまったのでは、いかなる手段を用いても、状況を乗り越えられません。また、ちょっとでも助けてもらいたいという、そういうこの依頼心や、楽をしたいという逃げの心があったならば、状況は浅くしか読み取れませんから、またその状況は乗り越えられません。とにかく、いろんな意味において、まず実践的にですね、逃げたらいかん、向かっていくという、この気迫は、とにかく深さをつくるために、自分を成長させるために、人生においてなくてはならない基本的なこの原理ですね。とにかく子どもの問題でも、家庭の問題でも、職場の問題でも、とにかくは、問題にぶつかった時はね、おまえ、逃げるんか。逃げへんといって、こうぶつかっていく。ぜひそのことをね、まずはやってみてください。そういうふうにして、今、自分の置かれてる状況をですね、的確に読み取るという、この作業をしなければなりません。**

**次にどうするかということですね。次にどうするか。問題を解決するためには、絶対に理性を使わなければ、答えは出ませんからね。どういうふうに理性を使うかですね。まずね、問題にぶつかったら、どんな問題でもですね、悩みながら考えたらいかん。苦しみながら考えたらいかん。みんな、苦しみながら考えてね、悩みながら考えるからね、考えても、考えても、絶対に問題を乗り越えられないんですよ。苦しむだけになるんですよ。悩みの、悩みや問題のどつぼにはまって考えてもね、答えは出ないんですよ。じゃあ、どうするんですかといったらね、どんな大きな問題でも、どんなちっちゃな問題でもね、問題と悩みにぶつかったら、まずどうするかといったらですね、この問題が、俺の問題やなくって、他人の問題で、他人からこの問題で、もし俺が相談されたとしたら、俺はその他人にどうアドバイスしてやるだろうかというふうに持っていかないと、正しい回答は絶対出てこないんですよ。そういう方法を使わないで、答えを出してもね、その答えは必ず間違ってるんですよ。間違ってるっちゅうことは、自分で悩みながら出した答えは、ますます自分を苦しめるんですよ。ますます問題をこんがらがらせるんですよ。**

**とにかく、まずはですね、もし、この悩みが他人の悩みだったとして、他人から、俺はこんなことで悩んどるんやと。どうしたもんやろうなとこう、相談されたらね、他人の悩みやったら、俺ならどう言うかということを考えてね、俺だったら、あいつにこう言うやろうなと思ったら、その思ったことを自分がやってみる。これがですね、この理性を正しく使う方法なんですよ。なんでそうなのかと。それは理性という能力は、客観性と普遍性の能力である。理性は客観性と普遍性の能力である。客観性とは外から見るんだ。普遍性とは全体を見るんだ。理性という能力は、外から全体を見るという立場を与えてあげないと、正しい回答が出せない能力なんですよ。この理性の使い方というものをね、大学に行っても習ってきませんからね。だから、みんなね、高学歴のね、東大を出た人間が、悩んで悩んで、自殺をして、自ら人生を駄目にするんだ。理性は客観性と普遍性の能力である。客観性とは外から見るんだ。普遍性とは全体を見るんだ。理性は問題や悩みを外から全体を見るという立場に立たなければ、答えが出せない能力なんですよ。この理性の使い方ということのですね、原理をちゃんと押さえないと、人生は生きづらくなります。**

**例えばどういうことなのかといったらですね、深い森の、深い森の中に迷い込んでしまったとする。深い森の中に迷い込んだ状態でね、迷ってる状態でね、どちらのほうに進んでいったら、早く出られるだろうと考えてもね、答えなんか出るはずはないんですよ。全部当てずっぽうなの、とにかく。深い森の中に迷い込んでるんですよ。迷い込んだ状態どちらに行ったらええやろうなって、いくら考えたって、考えることはできてもね、全部当てずっぽうなの。何が正しいかわからんのですよ。じゃあ、深い森の中に迷い込んだ時にね、どうすれば一発で正しい答えを出せるのかといったら、方法論としてはね、とにかくは、その森の中に入っておる一番高い木のてっぺんに登るんですよ。それも現実的にはなかなか難しいことでね、こんなことできるかっちゅうようなことになりますけども、一応、理屈としてはね、森の中に迷い込んでしまって、その森から出ることができる、一番近道をちゃんとはっきり正しくつかもうと思ったら、どうするかっちゅうたら、その森の中に入っておる一番高い木のてっぺんに登るんだ。一番高い木のてっぺんから、森全体を外から眺めるならばね、そこにおるんやったら、こう行ったらあそこに出られるやないかと、一発で答えが出るわけですよ。これが理性の使い方なんだ。この原則をちゃんと踏まえないと、いかなる問題も、答えを出しても、またその答えが新しい悩みをつくり出すんですよ。ほとんどその失敗でね、人間は苦しむわけだ。**

**これは絶対に忘れてはいかん人生のまた大原則です。悩みながら考えたらいかん。どんな問題でもね、子どもの問題でも、夫婦の問題でも、職場の人間関係でも、お客さんとの問題でも、仕事の問題でも、とにかくまずはね、この問題が他人の問題だったとして、俺にその相談が持ち掛けられたら、俺ならその他人にどうアドバイスしてやるだろうか。そう思っていったら、必ずね、正しい回答が出るんですよ。これ、よく芸能人のね、悩みが週刊誌に載ってますよね。芸能人本人はね、本当にもう、身も痩せ細るほど悩んでるんだ。だけど、その悩みを読む奥さま方はね、他人ごとだからね、こんなことはこうしたらいいんだよねと、もう一発でね、正しい答えをぽんと言ってしまってるわけですよ。他人のことやったら、はっきり見えるんですよ。なんでこんなことで悩んでんのと。こんなこと、こうすりゃいいやないってね、いっぺんにもう正しいことをぼんと言ってしまえるんですよ。これほどね、理性の使い方いかんでね、人生は変わるんですね。問題のどつぼにはまるか。問題の外に出て眺めるか。これは大違いですよ。**

**問題のどつぼにはまってね、この悩んでるとね、そうすると、どうなるかといったらですね、どんなことをしてもね、何か人間の行動というものは、必ずプラスの面とマイナスの面があるんですよね。だから、小泉さんがどんなに素晴らしい改革をしようともね、改革というものは、必ずね、その改革によって得する人間半分、その改革によって損する人間半分、出てくるんですよ。これ、致し方がないことなんだ。全部、対という構造で社会は動いてますからね。どんなことをしても必ずね、プラス面とマイナス面があるんですよ。この悩みながら考えると、どつぼにはまって考えるとね、こんなことしたら、こういうことになってしまうしな。こんなことしたら、隠しておきたくてもわかってしまうしな。こんなことしたら、あの人に迷惑掛かってしまうしな。こんなことをしたら、またこんな問題が出てくるしな。やることのね、マイナス面ばっかり見えてくるのがね、悩みのどつぼにはまって考えるということをした場合の結果なんですよ。そうなるとね、なんにしても、全部、こういうことをしたらこんな問題が出てくる。こんなことしたら、こんなことになってしまうという、マイナス面ばっかりこう気になるもんですからね、ついには、何してもいかんことになってしまってね、そして、もう俺が死ぬっきゃないかということになるわけですよ。**

**もうそういうことになって、もう俺は死ぬしかないんやと。もうどうしようもないんや。俺は死ぬしかないんやといって、こう友達に話をしますよね。そしたら、だいたい友達っちゅうものは、いくら死ぬっきゃないんやと言われてもですよ、友達っちゅうのは、友達とか他人というのは、じゃあ、死ねよとは言いませんからね。だいたいが、そのもう死ぬしかないんやと言ってもですね、まあ、待てよと。死ぬ気になったら、なんでもできるやないかというのが、だいたい、その一般的な対応なんですよね。他人ごとだったら、それが言えるんですよ。自分ごとになったら、死ぬっきゃないんですよ。この幅、この感覚、この間、このゆとりがね、その命を殺すか、生かすかを決定する、大きな、なんちゅうか、本中華、冷やし中華ですね。この大きなこの勘所と申しましょうかね、問題点なんですよ。自分で考えたら、死んじゃう。他人やったら、まあ、待てよっちゅうんですよ。この違いは大きいですよ、本当に。だからね、だから、とにかくはですね、そのあらゆることを他人ごととして客観的に外から見るというね、その視点をですね、理性に与えてあげるということがですね、ものすごく大事なこれは、人生を生きる秘訣なんですよ。**

**子どもの問題でもね、自分の子どもで悩んで、お母さんが対処しようとするとね、どうしてもね、自分本位、自己中心的な判断しかできないんですよ。他人が言うような、客観的なものの見方はできないんですよね。ついつい自分かわいさ、ついつい子どもかわいさでね、間違った判断をしてしまうんですよ。結果として、余計に子どもをね、つらくして、苦しめてしまう。また自分も窮地に追い込まれてしまう。他人の子どもやったらといったらね、ものすごい気楽に判断できますからね、本当、的確な回答が出るんですよ。もう夫婦げんかは犬も食わない。これは、夫婦はがちがちなけんかをしてますけどね、他人が見たら、またあんなことでって言うんですよね。その夫婦げんかしながらでもですよ、もしこれを他人が見ておったらと思ってね、他人やったらどうするやろうと思ったら、もうばかばかしくなってしまってね、もうやめとこうかということになるわけですよ。その夫婦は中で、そのお互い向き合って、外から見るその目が全然ない状態でけんかしてますからね。だから、ばかばかしいことで皿を投げたりね、もうフォークを投げたりね、めちゃめちゃなけんかをしてると。**

**とにかくこの理性の使い方、これ、一生、忘れたらいけませんよ。本当に。死ぬまで。どんな問題でも、どんなちっちゃな問題でも、どんな大きな問題でも、とにかくはね、他人ごとやったら、他人のことやったら、というふうに持っていくというね、この操作がね、できなければですね、われわれは、人生の問題を解決する正しい答えを出せません。本当に。その例え話としてね、その森の中に迷い込んだらという話を、ぜひ忘れないでおいてください。深い森の中に迷い込んでしまったら、どうするんやと。迷い込んだ状態で考えとったら、絶対、回答は出るはずがない。回答を出そうと思ったら、正しい回答を出そうと思ったら、とにかくは、その森の中に生えとる一番高い木のてっぺんに登って、森全体を外から眺めるという視点を理性に与えてあげないと、正しい回答は絶対出てこない。この作業をね、その作業をちゃんとできる力、それが理性なんですよ。それが理性の自覚ということなんですよ。自覚的に何かをするということなんですよ。そういうふうにして、理性は正しい答えを出すんですね。これはまだ、結婚してないね、若い方もいらっしゃるでしょうから、結婚の問題で悩んだ時にでもね、とにかくもう、結婚してらっしゃる方は、子どもの問題で悩んだ時でも、学校の問題で悩んだ時でも、とにかくも全部が全部、この方法でやらんと、自分を苦しめますよ。**

**これはとにかくは、問題を乗り越えるための基本原理です。だけども、その問題を乗り越えていく力をね、さらにこの成長させていこうと思ったら、どういう努力をこのセントバーナードかですね、そのことを次に考えないかんと。基本的には、とにかくは、この理性は客観性と普遍性の能力であるということをまずちゃんと押さえて、それをどう次は生かし、使いこなしていくかなんですね。そこで次の問題はですね、この物事の本質を見抜く眼力をつくると。この問題解決能力というものをですね、成長させていこうと思ったならば、やっぱりその物事の本質を見抜く眼力というものをつかめばですね、より問題は乗り越えやすくなります。もちろん、この外から見るんですけどね、外から全体を見るんですけども、その時にでも、その物事の本質を見抜く眼力というものを持っておったら、焦点が定まるんですね。その意味で、この物事の本質を見抜く眼力という感性をですね、つくる努力をしなければなりません。どこを突いたら、その問題はですね、乗り越えられるのか。その肝心要の勘所はどこなのかというのは、これは理性ではわからんのですよ。感性でしか。これ、勘所でしかつかめないんですね。**

**学問ではですね、物事の本質をつかむための方法論というのがあるんですよね。哲学というのは、みんなそういうこの問題を解決するという、そういうこの方法論をみんな持ってるもんですから、みんな方法論があるんですよ。カント哲学なら、先験的方法、ヘーゲルなら、弁証法的方法ね。あるいは、科学であるならば、帰納的方法、あるいは演繹的方法、いろいろです、その哲学なりにある。また、私の感性論哲学でもですね、感性論哲学なりに物事の本質をつかもうと思ったらどうするかといったら、これは発生学的解釈学というね、発生学的方法というのがあるんですよ。だけども、その方法論にこだわってですね、物事の本質を見ようとするとね、その方法で見る本質しか見えないんですよ。方法論で現実に対応しようとすると、その方法論が現実をゆがめてしまうというかですね、その方法論でしか見えない本質しか見えてこない。いろいろその本質を見抜く方法論があるっちゅうことは、方法論ごとにその見えてくる本質が違うんですね。これがまた大きな問題なんですよ。**

**だから、現実を生きるためにはね、あんまり学問は役に立たんのですよ。だから、どんなに大学で高度な学問を習ってきてもね、社会で仕事をしようと思ったら、またいちからね、現場に出てですね、仕事を勉強せんことにはね、仕事にならんのですよ。知識や学問では仕事はできません。現実は多種多様ですからね。理論どおりには動いてないんですから。そんな意味で本当の現実を生きようと思ったらね、学問はもちろん必要ですけども、学問だけではね、役に立たん。生きられないんですよ。基本原則だけでは。だから、多くの場合ね、学者という人間は現実を見損なうっちゅうかね、現実というものをこの本当にはわからないんだ。だから、東大や京大やって出て、官僚になるでしょう。数字でしかものを見ませんからね。現実は全然、見てないんですから。数字というのは、平均的なものしかわかりませんからね。全然、現実がわからないし、現実の苦労がね、感じられないですよね。理性でしか見えてこない。**

**現実に対して盲なのが科学者なんですよ。本当の現実が見えてない。実験室、実験室の現実しかないんですよ。本当の生きた現実は知らんのですよ。最近はその反省があってね、どんどん学者も現場に出てきまして、現実と関わりながら研究するということになってきましたけど、まだまだ、でもね、研究は研究室なんですよ。本当の生きた現実はわかってないんですね。だから、われわれもね、単に学者を尊敬するだけではいかんので、学問的方法には限界がある。方法論を用いて現実を見れば、現実はゆがんでしまう。その方法で見える現実しか見えてこない。その方法で見える本質しか見えてこないということを知っていなければならない。**

**じゃあ、この本質を見る眼力という生きた力をね、どうつくるのかといったら、これは今、自分がプロとしてやっておる仕事の中から出てくる問題を教材にしながらですね、今、自分がプロとしてやってる仕事の中から出てくる問題を教材にして、この問題の本質はどこかという、そういうこの意識でですね、その物事の本質をつかもうとする努力をする。そうすると、プロならね、だいたいプロの感覚でね、生きた現実をつかむ見当が付くわけなんですよ。その自動車の整備工ならね、その故障車を持ってくると、そうすると、ここが故障やったらね、原因はこれか、これか、これやと。だけど、こういう故障の仕方は、多分ここやといって、もうちゃんとね、見る前から、だいたい見当を付けて、作業をし始めるんですよね。それがプロなんですよ。それが生きた現実をね、見るこの目なんですね。それを眼力というんですよ。見当が付くというのは眼力なんですよ。だけど、その学問的な研究をしておる人はですね、一つ一つ、ここが故障だっちゅうことは、これか、これか、これか、これか、これやと、まずこれからやってみようかって、いちいちその一つ一つ、やってみるんですよね。時間がかかる。無駄が多い。**

**そういう意味でですね、本当に生きた現実の本質をつかもうという眼力は、これ、感性ですから、だから、眼力は感性ですから、今、自分がやっておる仕事の中から出てくる問題を教材にしながら、常にその問題の本質はどこかという、そういう関心でですね、その問題に対するという、そういう努力をしておると、だんだん、だんだん、その問題の核心というものをつかむですね、能力が成長してきます。だから、画家は絵を描きながら、問題をつかむ眼力というですね、そういうものをこうつくって、その人なりの、その個性あるものの見方、本質のつかみ方というのを獲得するんですよ。そして、どんな道筋からいってもね、その頂点に立てば、全部同じなの。これ、富士山に登るルートがいくつもあって、頂点に立ったら同じ景色が見えるというのと一緒でですね、方法論は違っても、究極、詮ずるところ、頂点に立ったら、同じ力ができてくるということになるんですね。だから、仕事は違ってもね、その仕事を通してつくり出された本質を見抜く眼力というものは、その最高のところまでいったらですね、みんな共通するものが、共通するものが備わります。だから、画家は画家でもね、その絵を描くことを通して、その問題の本質を見抜く眼力を持ったならば、いろんな政治のことについても、経済のことについても、全然畑違いのことでも、見当が付くというね、そういうこの普遍性が出てくるんですよ。**

**そういうふうにして、このものを見る目、人を見る目というものをね、その仕事を通してつくっていく。だから、このアサヒグローバルの皆さん方でも、この建築業のですね、この仕事というものを通して、今、自分のやってるその仕事を通してですね、そのところから出てくる問題の本質も見る眼力というのをつくる努力をするならば、その目でですね、人を見る目、また、その目でものの値打ちとかですね、そのものの価値を自分が判断できる、そういう職人というかですね、プロとしてのそういう眼力というものが、できてきてですね、いろんな問題に対して、その能力は適用される。役に立ってくるんですね。ぜひ仕事を通してね、そういう感性を養う。仕事を通して、物事の本質を見抜く眼力をつくっていくということを、ぜひやってみてほしいと。これはこの仕事を離れてもですね、ものすごく大きな役に立ちですね、また自分のこの人間性というものの質を高めていくですね、非常に重要なこれは課題であります。そういうこの物事の本質を見抜く眼力というものを持ったならばですね、もっともっと理性を使う効果がですね、この際だって、もっともっと正しい厳密なですね、高度な答えを出すことができる。質の高いですね、質の高い答えを出すことができる。そういうこの結果になってきます。**

**ただ、他人から相談されたらというね、そういうこのやり方というのは、これは単にある一定の方法論ですけども、それに物事の本質を見抜く眼力を付け加えるならばですね、よりこの的確なですね、この判断、より厳密な判断、より高度な判断、より深い判断というね、そういうふうに理性が成長していくことになりますので、その意味で、これは必要なんですね。答えにも水準がありますから。富士山でもね、２合目から見える景色はこうや。５合目から見える景色はこうや。８合目から見える景色はこうや。全部正しいんです、それは。間違いじゃない。だけども、どの水準から見るかによって、見え方が違ってくるというね、そういうこの違いがあります。これが質の問題なんですよね。質を高めていったならば、同じ正しさでも、より正しいというね、そういうふうなこのものの見え方がしてくるわけであります。自分の能力や人間性のレベルに応じてですね、その物事の本質でも見え方が違ってくる。また、その水準なりですね、厳密さが違ってくるというね、そういう違いがありますので、その意味で、この悩みを乗り越えていこうと思う場合でもですね、より高度で、より厳密で、より質の高いですね、そういうこの判断能力というものをつくっていくことが、大事だと。**

**その次はですね、理念への問いを持つと。これもやっぱり、その人を見る目、ものを見る目、そういうこの問題を乗り越えていく場合のですね、その判断能力を成長させるために、また非常に大事な努力なんですね。人格の深さをつくるための理念への問いとはいったいなんなのか。これは高さをつくるためにもね、理念への問いというのはあったんですよね。高さをつくるための理念の問いというのは、人間としていかに成すべきか、いかにあるべきか、いかになるべきか。これは自分で自分を律する、自律の問いといってですね、この自律の問いを持つことによって、高潔なる人物というですね、他人のこの思惑によって、対立的に自分が支配されない。世の中の風潮に流されない。この孤高の鉄人と申しますけど、他人に流されず、他人の思惑によって自分が支配されないで、他人がどう言おうと、俺はこうだというですね、そういう信念を持った生き方ができる。それを孤高の鉄人といって、確信を持った、信念を持った人間の生き様と、こういわれて、人格の高さを表現する１つですけども、人格の深さをつくるための理念の問いとはなんなのかというとですね、その人間にとって、人間にとって、真実の愛とはなんなのか。本当の勇気とはなんなのか。そういう種類の問い掛けをするんですね。**

**あるテーマがあって、そのテーマに対してですね、この真実のとか、本当のとか、そういう形容詞を付けて問うんですよ。人間にとって、真実の愛とは何かという、この問いにはですね、答えはありません。こうだという答えを持ってしまったら、もうそれで成長は止まるんですよ。人間は成長し続けるものだ。人間は不完全な存在だ。不完全っちゅうことは、単に不完全だけじゃなくってですね、人間は不完全でありながらも、完全、完璧を求めるという、そういう生き方をするところに、人間の生き方のまた原理がある。不完全でありながらも、完璧なるものを求めるけども、絶対完璧にならん、完全にはならん。だから、人間の意識の領域は無限なんですね、無限。答えはないんだ。無限に高くなり、無限に深くなり、無限に広くなり、無限に発展、成長するのが、人間という世界のですね、この素晴らしさであります。**

**実際問題、学問は真理を探究すると申しますけどね、その真理は変わるわけですよ、時代によってね。昨日まで真理だといわれておったものが、今日はうそになって、新しい真理が生まれてくる。学問の真理は無限なんですよ。無限という領域において、それは存在するんだ。もうこれで決まりやっちゅうたら、そこでもう発展成長はなくなりますからね。そこで終わりなんだ。歴史は終わりなんだ。だけど、そうなってない。常に真理は書き換えられるんですよ。それをもってしてもね、人間の住む世界は、この無限という領域がですね、人間の世界だ。神は絶対だ。人間は無限という領域に住んでおる。だから、答えを持って安堵してはならない。そういう意味でですね、人間にとって真実の愛とは何かという問いを持っても、答えはない。あるんだけどね、どんどん、どんどん、無限に深まりですね、無限に高まりという、そういうふうな、その世界なんですよね。そこでどうなるかといったらですね、人間にとって真実の愛とはなんだろうというね、そういうこの問いを持ちながら、その『ベルサイユのばら』を読んじゃったりね、またそういうこの人間にとって真実の愛とはなんだろうという問いを持ちながらね、いろいろ、その恋愛文学とかね、恋愛のね、この漫画のコミック読んじゃったりしてね、その真実の愛とはこうだろうかな、ああだろうかな、そうだろうかな、どうだろうかなとやってる間に、だんだん、だんだんですね、だんだん、だんだん、その段々畑と申しましょうかですね、その愛についてのですね、理解がどんどん、どんどん、深まっていってしまったりして、そして、その愛に対する理解が深まることによってですね、人を見る目、ものを見る目がどんどん深まっていって、成長していく。これが、この深さをつくるための理念への問いということなんですよね。**

**問いが大事だ。答えを持ってしまったら、そこで止まりますからね。そこで終わりの人間。でも、人間はここで終わりがないんですよ。理念でも、理想でも、これが完璧ということは絶対にないわけで、先には先がある。それが歴史ですからね。今、民主社会だといってですね、民主社会といえば、正しいことの代名詞のごとく言われてますけど、民主社会よりもっと素晴らしい社会とはどんな社会なんだろうかっちゅうことを考えなきゃいかんという、今、時代に入ってるんですよね。もう民主社会は制度疲労を起こした古い社会なんですよ。だのに、日本人の多くの文化人はね、民主主義に合ってるかどうかで、正しいか、間違ってるか、判断をする。そういう保守的なですね、この考え方に陥ってしまってる。これは、人間の世界が無限というですね、この領域に存在することを忘れてしまってるんですね。常に答えを出すことばかりに、この専念してる。**

**だけども、人間においては、答えを持つことも大事だけど、もっと大事なのは問い続けることなんだ。問わなければ成長はない。答えを持って問いを忘れれば、その人間は社会を破壊する悪人になってしまうんだ。答えを持って問いを忘れればね、自分と違う答えは許さない、認めない。他人と対立をする。対立するっちゅうことは、社会を破壊するんだ。答えを持ってしまって安堵すれば、それは人でなしだ。答えを持ちながらも、なおかつ問い続ける。それが不完全なる人間の誠実さであります。現実を生きるためには、答えがなければならない。だけども、答えに縛られてしまっては、社会を破壊する人間になってしまう。宗教が違うから戦争をする。考え方が違うから別れてしまう。自分の子どもが言うことを聞かんからむかつく。人間じゃないんだと。人間性が壊れてしまうんですからね。人間の住む領域は無限である。絶対的に正しい答えになってないんだ。よりよい、より素晴らしい答えがあるだけなんだ。そして、どこまでいっても、より素晴らしい、より深い、より高度ということがあるのが人間の世界なんだ。それが無限ということの素晴らしさである。**

**だから、この人間にとって真実の愛とはなんだろうかということをね、問いながらですね、ああだろうか、こうだろうか、そうだろうか、どうだろうかと言ってると、どんどん、どんどん、その愛に対する理解が深まっていって、結果として人を見る目、ものを見る目の深さができてくる。また人間にとって、真実の勇気とはなんだろうか。そういう問いを持ちながらですね、今度はその『北斗の拳』を読んじゃったりしてね。本当の勇気とはこうだろうか、ああだろうか、こうでもないな、そうでもないな。だんだん、だんだん、この勇気というものに対する理解が深まっていってですね、結果として、他人が見過ごすところにも、その人の勇気を発見してあげたりして。他人は全然、その人の行動を評価しないのにね、その勇気というものに対する理解の深さを持ったその人間だけがですね、その人の勇気に気付いてですよ、おまえ、すごいやないかと。勇気あるなって、こう褒めてあげる。そしたら、この人こそ、俺のことを本当にわかってくれる人やということになってきてですね、特別の深い、素晴らしい人間関係が生まれてくるというね。そういうことになってくる。**

**深さというのは、物事のより根源的で、より本質的な意味と価値を感じる感性ですからね。より根源的で、より本質的な意味と価値を感じ取る力、感性というのは、そういうふうにしてできていくわけですよね。真実の愛とはこうだろうか、ああだろうか。本当の勇気とはこうだろうか、ああだろうか。人間にとって、本当の強さとはなんだろうか。こうだろうかな、ああだろうかな。そこで強さというものもね、またどんどん、どんどん、その理解が深まっていってですよ、そして、ちょっと見たら、弱いと見えるところにでもですね、こういう状況で退却する、逃げるということは、本当は強くなかったらできないとかね、そういうことをですね、感じ取ってあげたりして、その人の行動を評価するという力が生まれてくる。そういうこの素晴らしいですね、ある意味で感動を呼ぶような、そういうこの場面が自分でつくれるわけですよね。人間にとって本当の正しさとはなんだろうか。人間にとって真実の美しさとはなんだろうか。表面的に顔が美しいだけじゃない。本当に人間として美しいとはいったいなんだろう。そういうことを問い続けていったらね、うっかり人が見過ごすところにも、ものすごい人生の美学があるということをね、発見したりしてですね、どんどん、どんどん、心の世界が豊かに、美しく広がっていって、そして、感動を呼ぶような、そういう言動がですね、出てくるような人間になれるわけであります。**

**とにかくこの深さというものをつくっていくためのですね、理念への問いというのは、人間にとって真実の愛とは何か、本当の勇気とは何か、この愛とか勇気っちゅうのは、いろんな言葉に置き換えればいいんですよね。自分なりのテーマを掲げながらですね、真実の強さとか、あるいは、本当の正しさとか、いろいろそういう言葉に置き換えてですね、そして、本を読み、仕事をするんですね。そうすると、そういう問いを持って、その仕事をしてなかったら、こんなことには気が付かなかっただろうという気付きが飛び込んできて、そして、自分のそういう物事に対する深い理解の仕方をですね、このつくってくれるわけですね。これが深さというものをつくっていく方法論、精神的原理であります。**

**次はですね、その物事の意味や価値について考えると。人間の心というのは、意味と価値を感じる感性ですから、人間の心を深さという面で成長させようと思ったならば、われわれはどうするかといったら、ただ漫然とね、ただ漫然と生きて仕事をしておったんでは、この意味や価値を感じる感性というのは成長しません。心は成長しません。だから、人間は理性を持っておるんだから、理性を手段能力に使いながらですね、この意味と価値を感じる感性を成長させていくということをする必要があります。そして、人間は、最高に意味を感じ、最高に価値を感じ、最高に値打ちや素晴らしさを感じたらね、人間はどこまでいくのかといったら、最高に意味を感じたら、人間はもう俺はこのためやったら死んでもいい。もうこのために生きて、このために死ねたら本望やというね、そういうこのところまでいけるわけですよ。それが最高の深さなんですよね。だから、今、自分のやってる仕事でですね、俺はこのためにだったら死んでもいい。俺はこの仕事をしながら生きて死ねたら本望だというふうに感じてない人は、まだその仕事の、最高の仕事の仕方をしてない。またその仕事の本当の醍醐味をまだ感じてない。半端なんですね、まだ。**

**本当のプロというのはですね、ちょうど役者さんが舞台の上で死ねたら本望だというようにね、本当のプロというのは、俺はこの仕事をしながら生きて死ねたら、なんも言うことはないと。もうそれで十分やと。本望やとこう、言えるわけですよね。また、本当のプロというのは、ほかにもいっぱい、いい仕事はあるかもしらん。ほかにもいっぱい、いい仕事はあるかもしらんけども、俺にとっては、この仕事が最高ですと、こう言えるわけですよね。それがその仕事のプロだ。それは、その仕事の、この仕事をせんことには、この醍醐味はわからんぞというのをつかんだら、それが言えるんですよね。仕事が違うっちゅうことはね、ほかの仕事とは違う何か醍醐味があるはずなんですよ。この仕事をせんことには、この素晴らしさ、この感動、この面白みは味わえんぞというのはあるわけですよね。それをつかんだ時、その仕事のプロというね、そういうこの値打ちが出てくるわけですね。それをつかんだら、人間はどうなるかといったらね、もう俺はこの仕事のために生きて死ねたら本望やと。もうあとはなんもいらん。そういうこの死んでもいいという気持ちが湧いてくる。それが最高に意味と価値を感じた時ですね。その時、その人間はその仕事の最も深いものをつかんだといえるわけですよ。**

**だから、まだ死んでもいいと思う、その実感が出てきてないということは、まだ不完全燃焼の人生と申しましょうかね、まだその仕事の本当の値打ちをまだわかってない。だから、なかなかその熱が入りにくいと。結局、その仕事にどの程度、自分が打ち込めるかは、その仕事にどの程度の意味と価値とを感じてるかによるわけですね。人間、意味を感じないでやる気にならない。価値を感じないと、価値や素晴らしさを感じないと、命は燃えてこない。より深い意味や価値を感じる感性ができた時、人間はどんどん、どんどん、その仕事にのめり込んでいける。本当にその仕事の素晴らしさを感じたら、最終的には死んでもいいことになる。恋愛でも、最高に燃え上がった時はね、恋愛でも最高に燃え上がった時は、もう、もう俺は、こいつのためやったら、もうなんでもしたると。もう俺はこいつのためやったら、死んでもいい。それが、恋愛が最高に燃え上がった時ですからね。**

**よく女の子は、そういうことを使ってですね、男の愛を確かめたりするわけですよ。寒い冬にね、海が見たいなんていうようなことを言ったりしてね、海が見たいって言うから、じゃあ、連れていってやろうかといってですね、車に乗せてですね、海岸に行ったりするわけですよね。その降りてね、景色を見ておって、夜景を見ておったら、突然、女の子がですね、本当に私が好きやったら、この海に飛び込んでごらんなんていうようなことを言ってですね、こんな寒い時に飛び込めなんて、そんなばかなことを言うような、そんな女はもうごめんやとなってしまったら、その程度の愛なんですね。それで、厳寒のそのね、その冬の寒さの中でね、飛び込んでごらんと言われて、飛び込んだろうやないかっちゅうて、飛び込んでしまったらね、そんなに好きやったのっちゅうことで、ようやくその愛が確かめられてね、その結婚することになってしまったりしてね。そういうこの、いわゆる、理屈を超えたね、そういうこの愛の確かめ方というのはあるわけですね。最高に好きやっていう場合にはね、もうこいつの言うことはなんでもやったろう。銀行強盗をやってごらんいうんやったら、やったろうやないかと言ってしまうようなね、そういうこのばかなことも、ばかができるのもこれ、愛ゆえなんですよね。理屈ではそれはできませんからね。**

**とにかく人間は、最高の意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じればね、死んでもいい。そういう気持ちが出てくるんですよ。なんでもしたると。もう、こいつのためやったら、泥棒でも、強盗でも、なんでもしたろうやないかと。そういう気持ちになってしまうんです。もう倫理も道徳も吹っ飛んでしまってですね。その時、人間は最高の人生、最高の喜び、最高の幸せ、最高の命を燃やす生き方ができるんですね。そのためにはですね、どうするかといったら、やっぱり、現実的には、今、自分のやってる仕事にどういう意味や価値や値打ちや素晴らしさがあるのかっちゅうことをね、まず考えないと駄目なんですよね。考えないと、感性は成長しませんから。理性を手段能力に使って、今、自分のやってる仕事の社会的意味、職場における価値、または人生における意味や素晴らしさというものをですね、いちいち考えるんですよ。考えて、ああ、この仕事は、私の人生にとってこういう価値があるんかもしらんなと思いますとね、そうすると、その理性が考えた価値を感性が感じるように成長してくるんですね。そういう感じ方をしながら、その仕事をすることになるわけですよ。そうすると、前よりもっとその仕事に打ち込めてですね、前よりも、その仕事をしてる姿が美しくなってね、そして、その仕事の成果がどんどん上がってくるんですよ。**

**今、自分のやってることの意味と価値と値打ちと素晴らしさというものを理性で考えると、理性が考えた意味を感じる感性が成長してくる。感性がそれを感じた時、命は燃えてくる。前とは違った仕事の仕方ができる。命に、感じると、命は喜びますからね。感じないと喜びというのは出てきませんからね。人間の心は、意味と価値を感じる感性だ。意味を感じないで、その仕事をしてるっちゅうことは、意味のないことをしてるんですね。価値や素晴らしさを感じないで、そんなことをしてるっちゅうことは、価値のないことをしてるんですね。そんな価値のない、意味のない人生なんて、生きたらいかんと。どうせするんやったらね、意味と価値と素晴らしさを感じながらしてないとですね、自分もつまんないですもんね、これ。どうせするんやったら、この仕事にはどういう素晴らしさがあるのかと。私はこんなすごいことをしてるんやと思って、こう、やってないとですね、面白くないですよ、やっぱり。同じするんやったら、どうせするんやったら、意味と価値を感じながらしてる。それが人間だ。意味と価値を感じなかったら、ただの機械だ、動物だ。**

**そのために、われわれは理性を使いながら、感性を成長させていってですね、最終的にはですね、最高の意味と価値をその仕事に感じる。その自分のやってることに感じるという、そういう自分をですね、つくる努力をすることが、自分が幸せになる道ですからね。そして、最後は、もうこれ以上、素晴らしい人生はない。これ以上、素晴らしい生き方はないというのが、このためにだったら、俺は死んでもいい。私はこのためだったら、このために生きて死ねたら、もう最高だわと、こう言えるね、そういう自分ができたら、これはもう、それ以上のない生き方なんですよね。感じてこそ人生、燃えてこそ人生、命から湧いてくるものがあってこその人生。人間の心は、意味と価値を感じる感性だ。意味を感じなければ、価値を感じなければ、人間に人生の値打ちはない。とにかくそういうこの意味と価値を感じるための、その努力としてですね、理性によって意味や価値を考えて、その理性が考えた意味や価値を感じる感性をつくっていく。そういうふうにして、自分を成長させるんですね。**

**何を感じながら生きてるかが、自分の人生がどの程度のレベルのね、人生かを決めるんですよ。感じなきゃ、まったく無意味ですから、人生はね。感じてこそ人生。感じなかったら、機械、物体だ。その次の精神的原理はですね、この自分の本音と実感を言葉で的確に表現する努力をすると。これは日本人がやってきた短歌とか、俳句をつくるというね、そういう作業と似てるわけですけども、とにかく自分の本音というものをどう言葉にするか。なかなか若い間はですね、自分の思いはあってもね、なかなかその思いを言葉で言えないんですよね。だから、こう若い人は、どう思うって言われてもですね、いや、なんもっていってですね、なんも言わないんですよね。何か意見はって言われても、こう言いたいものはあるんだけどね、どういうふうに言ったらこう、いいのかわからなくって、いや、べつにとこう、言ってしまったりしてね。言葉にならない。言葉にできない。これはまだ自分の、自分自身が漠然としてるんですね。自分が自分でわかってないという、そういう状態で、言葉にし得ないということは、まだ不安定で、漠然としてて、混沌たる状況の自分なんですね。言葉で明確に自分の意識がですね、思いが、本音が、表現できることによって、初めて自分を出すことができる。**

**自分の本音をですね、言葉で表現するためにね、どうするかといったら、日記を付けるとかですね、文章を書くんです。すると、その自分の思いが言葉にこうなってきますから、そうするとですね、日記を付け始めて、自分の心を整理し始めると、だんだん、だんだん、自分とはなんなのか。自分の考え、自分の思い、それがはっきり言葉でこう、表現できるようになってきまして、そして、会社の中でも、社会の中でもね、私はこうですとこう、堂々と言えるというね、そういう力が出てくるわけですね。そして、より的確に自分の心を、自分の実感をですね、表現できるという言葉をこう、どんどんこう、成長させていく。そうすると、その人に深みができてくる。同じことを言っても、なかなか深いことを言うなというね、そういうこの感じになってくるんですよね。**

**だから、俳句でも、素人がつくった俳句とね、やっぱり、プロの俳人がつくった俳句とは、やっぱり味わいが全然違うんですよね。同じことをこう、俳句にしてるんですけどね、やっぱりプロがつくった俳句は、うーん、やっぱり深いなとこう、感じてしまったりするんですよね。芭蕉の句でも、僕の好きな芭蕉の句はね、「この道やゆく人なしに秋の暮れ。」それは、ずっとこう、俳句をつくるためにね、こう旅をする、そういうこの漂泊の人生というものをね、芭蕉は晩年期に歩んだわけですけども、日暮れになってですね、山道に差し掛かって、誰も、もう通ってないというね、そういう状況で、「この道やゆく人なしに秋の暮れ。」これはまさに、その道を詠んだんだけど、だけど、この道というのは、自分が今、歩いてる、俳諧の道であって、その、この自分が今、歩いてる俳諧の道、この道を自分と同じレベルでですね、歩んでくれる、そういうこの仲間というのはなかなかこう、出てこない、そういうこの孤独さを、憂う気持ちで出てきた句が、この、「この道やゆく人なしに秋の暮れ。」**

**それは、現実に今、自分が歩いてる山道を誰も歩いてないという、そういうこともあるんだけど、それを人生に当てはめて詠んでるわけですよね。この道やゆく人なしに秋の暮れ。自分と同じ思いで、この俳諧の道を歩んでくれる仲間が、なかなかこう、育たない、できてこないというね、そういう孤独さを詠んだ、句でもあるわけで、そういうこの自分の心を深く読んでいくと、人生がこう出てくるわけですよね。ただ状況を詠むだけじゃなくって、人生が出てくる。そういう深い句というのが、あるわけですね。それはこう、自分の心をずっと見つめていって、その心をどういうふうに表現したらいいかなということになってくると、その心を情景に託して詠むという、そういうふうなこう、力がね、できてきて、その素晴らしい俳句が生まれてくる。**

**皆さん方も『古今集』とか、『新古今集』とかね、もう洗練され尽くした、ああいう和歌の世界というものをいっぺん読まれたら、ものすごい感動すると思うんですけどね。なんて日本語って美しいんだろうと思ってね、ものすごい感動すると思うんですよ。それは、短歌というのは本当にね、人間の心の奥底を見つめ尽くしてね、それをどう言葉で表現すればよいかっちゅうことを、こうやってきましたからね。ものすごい、その深い美学がね、そこにはあるんですよね。そういうふうにして、自分の心をどう表現すれば、的確にですね、この言えるか。それを努力すると、どんどん、どんどんね、自分は深いという、そういうこの意識を持つことができるようになります。**

**最後のですね、この人間性の深さをつくる精神的原理ですね。これは、その知力、気力、体力の限界に挑戦すると、命が宇宙とつながる。一番深くなった状況というのは、宇宙とつながったという状況なんですね。宇宙から湧いてくる力というものを自分が感じ取った時ね、もうこれ以上のない深さというものが精神にも、あるいは、自分の生き方にもできます。だから、悟りというのはなんなのかといったら、悟りの究極は、宇宙との一体感、永遠の生命との一体感、これがもう、全世界、あらゆる悟りに共通するですね、境涯であります。これはヨーガでもね、そうですし、また、座禅でも、瞑想でもね、全部、究極の悟りは、その宇宙との一体感、永遠の生命との一体感というものを、究極の悟りにしてるわけですね。じゃあ、どうすれば、それほどのですね、この宇宙から湧き上がる思いとかって、そういうものをね、自分が持ってですね、深い人生の生き方ができるのか。どうすれば、宇宙とつながったというふうな、そういうこの意識でですね、生きることができるのか。そのことをですね、この考えてみる必要があると。**

**人間の命というものは、本来ですね、もうこの宇宙とつながっておるものであって、人間自身が宇宙の力によって、宇宙の摂理によってつくり出された一個の存在なんですからね。だから、多くの人が生かされて、生きておるという、そういう言い方をするわけですね。それは、その多くの人に支えられて、生かされて、生きてるっちゅうこともあるんだけど、だけど、深い構造からいったら、宇宙の力によって、その命は生み出されてですよ、そして、人間もやっぱり、その宇宙の根源から湧き上がる力と、それから、その宇宙の摂理というですね、そういうこの原理によってですね、人間は支えられて、生かされて、生きてるんだっていうのが、人間の命というものの、体系的な構造なんですよね。だから、人間の命の中には、宇宙の摂理が生きて働いておる。だから、昔から人類はですね、人間が、その母なる宇宙の思いに答えながら、人生を生きていくということをしようと思ったら、宇宙の思いを知らなければならない。宇宙の、自分を支えてくれてる、自分を生かしてくれておる宇宙の力、宇宙の意志というものを知らなければならない。そのために西洋では、占星術というね、そういうこの研究を、天体の動きというものをですね、宇宙の摂理の力として感じ取って、そして、その天体の力と同じものが、宇宙の摂理だから、自分の命にも働いてるんだ。だから、天体のその動きなり、天体のですね、さまざまな現象というものをですね、自分の命の活動に置き換えて理解をする。それが占星術の運命の読み取り方なんですね。**

**同様に、東洋でもですね、易学というのがあってですね、易学というのは、宇宙を構成しておる最小単位の元素にですね、あらゆるものを分解して、そしてその宇宙を構成しておる最小単位の元素というものを、この基礎にしながらですね、その組み合わせによって、命を理解しようというのが、当たるも八卦、当たらぬ八卦と申しましょうか、あれも半分は当たるんですけどもね。だけど、とにかくは、そういうこの命の中に働いておる宇宙の摂理というものをですね、この読み取る。そして、その宇宙の摂理というものを基礎にしながら、その原理に反しないように生きることが、幸福な人生、成功の人生を生きる秘訣だというのでですね、ああいう四柱推命だ、やあ、八卦だなんだかんだと、いろんなそういう易学があるわけですよね。昔からそういうふうにして人類はですね、最高の人生というものを生きるために、母なる宇宙の思いを自分の命に対して、そして、この生き切るということを求めていったわけであります。とにかくそういうことで、命は本来ですね、この宇宙とつながった構造において、生きて存在しております。だけども、その命はつながっておるんだけど、それがなかなか意識においてはですね、わからないんですよね。どうすれば、どうすれば、自分が意識という面でですね、意識において、宇宙とつながったっていう深さを自覚して、そして、宇宙から湧き上がる力というものを自分がいただいてですよ、そして、個の限界を超えた大きさのあるですね、この生き方ができるか。それが、この大成功の人生というものを生きる原理であるので、これまで人類もそれを求めてきたんですよね。**

**じゃあ、どうすればいったい宇宙とつながれるのか。その久保川社長さんのお話の中にもね、そういうこの宇宙とつながる、そういう宇宙的なものとの連関性というものを意識しながらですね、生き切るという、そういうお話がたくさん出てくると思うんですけども、そういう意味で、その久保川社長さんが、今日の大成功のね、この素晴らしい人生を確立された。また、この不況でありながらもね、この年々、最高益をですね、更新していらっしゃるような、こういう素晴らしい経営能力を持たれてるのは、単に久保川社長さん一身の力だけではないんですね。宇宙の摂理と一体化したね、そういう生き方をされてるからですね、自分の力とは思えないような力がですね、命を通して湧き上がってくる。であるが故にですね、この現実はどうであれ、宇宙から湧き上がる力によって生きていくからですね、現実の不況、好不況に左右されないでですよ、この高収益を上げていくようなね、そういう経営ができておるんじゃないかと思います。**

**普通の人間なら、やっぱり不況なら不況なりの影響を現実的には受けてしまうんですけども、そういう横からのね、環境の影響じゃなくって、久保川社長さんの場合には、宇宙とつながった命の根源から湧き上がる力でね、生きてますから、影響されてるものが違うんですよね。だから、普通の人にはできんことができる。普通の人にわからんことがわかる。だから、不況だっていっても、時代の流れがあって、何をすればもうかるか、何をすれば消費者は喜ぶか。皆わかってしまってですね、それに対する対応がちゃんと判断としてできてくるという、そういう力がこう、湧いてくるわけですよね。宇宙とつながれば、そういう普通の人間の生き方のレベルをはるかに超えたですね、そういう生き方が、誰でもできる。これは、そのみんなの命がですね、宇宙とつながってるんですから、そのことが自分の意識において自覚ができるならばですね、誰でもこの久保川社長さんのような、壮大なるこの素晴らしい人生というものをですね、満喫できるという、そういうことになり得るんですよね。**

**だけども、そこまでいくためには、必ず通らなければならない道があるんですよ。これなしには、絶対に宇宙とつながらんという原理がある。それがこの人生における苦労、悩み、問題にぶつかる。そして、逃げない、向かっていくという、この原理なんですよね。これがどうしてですね、最終的に宇宙とつながるという命のですね、深みというものをつくってくれるのかというとですね、人間の命も大宇宙の摂理によってつくり出された命である。だから、宇宙は人間にとって母なる命だ。われわれは、宇宙から見れば、子なる命だ。だから、子なる命がですね、精神的、肉体的窮地に追い込まれてですね、そして、その地獄の苦しみを味わいながらね、だけども、このままでくたばってなるものか。このままでは終わらんぞというね、そういうこの激しいですね、もがきを繰り返しながらですね、地獄をさまよってるとね、母なればね、見過ごせないんですよ。自分の子どもが苦しんでおったらね、お母さんだったら、なんとかしてあげたい。なんとかしてあげようという思いが湧いてくるんですね。その時、人間の命は宇宙とつながってしまうんですよ。**

**自分が地獄の苦しみをね、味わいながら、なおかつ、このままでくたばってなるものか。俺はこのままで終わらんぞ。なんとかこの不況を乗り越えてね、もう一花咲かせようというね、そういうふうな思いで頑張ってるとね、母なる宇宙の愛が目覚めちゃったりするんですね、母性愛が。なんとかしてあげたい。それは自分の命の中にね、宇宙の摂理が働いてるわけですからね、その宇宙の摂理、宇宙の力によって、自分の命は生かされてるんですよ。だから、その命が苦しめばね、もう自分の命は宇宙とつながってるんですから。自分の命が苦しんどったら、宇宙そのものがね、その苦しみから逃れる。そういう力をね、湧き出させてくれるんですよ。それが母なる宇宙の愛が目覚めたという、そういうことになる。解釈すればね。だけど、どん底でね、もがいておると、どうなるかといったら、どっかでね、なんとかなりますようにというね、祈る心が湧いてくるんですよ、どん底では。もうなんともならん。俺だけの力でなんともならん。だけど、なんとかせないかん。だけど、なんともならん。南無三、なんとかなりますように。**

**これは人間はね、その刃物を持った人間に追っ掛け回されるとね、誰も助けてくれる人がおらんところでもね、刃物を持った人間に追っ掛け回されてね、窮地に陥ったらね、なんでかわからんけど、助けてーっちゅうんですよ。誰もおらんのに、誰に助けを求めてるんやと。何故の叫びなんや。何に対して叫んでるんや。これはもう、その宇宙との生命連関が目覚めてですね、自分の命をこの世に生み出して、自分を支えて生かしてくれる、この母なる宇宙の愛にね、母なる宇宙に対してね、助けてと叫ぶのがね、真の祈りなんですよ。すなわち、祈りというのは、その子なる命が、母なる命に助けを求める生命の叫びなんだ。必ずどん底ではそれがあるんですよ、祈りが。べつに形で祈らなくってもね、命そのものからね、祈りたい気持ちが湧いてくるんですよ。その時、自分のその苦しみが、母なる宇宙の愛を目覚めさせて、そして、自分から宇宙とつながってるんですよね、それは。祈りという行為を通してね、自分がその宇宙を呼んでるというかね、その超越的な存在との助けを呼んでるという意識がそこで初めて芽生えてくるんですよ。**

**その自分が母なる宇宙のこの助けを呼ぶ。その叫びという、この祈りに応えてね、命の中に働いておる宇宙の摂理が目覚めてきてね、そして、その自分の苦しさをですね、助けてくれて、その自分の苦境から乗り越えさせてくれるという力が宇宙から湧き上がってくる。これはまさに、子なる命が苦しめばね、母なれば見過ごせないというね、そういう構造でですね、宇宙から湧き上がる力が与えられるんですよ。その時、人間は個の限界を超えた大仕事ができる人間になってしまう。これはもう、松下幸之助さんでも、本田宗一郎さんでもね、鉄鋼王のカーネギーでも、エジソンさんでも全部同じだ。自分の持ってる力でなんともならん。だけど、なんとかせんないかんともがいているとですね、そうすると、宇宙とつながってしまう。そして、宇宙とつながった人間は個の限界を超えた大仕事をする。誰でもみんな、その構造を命に持ってるんですよ。特別な人間しかできんのじゃないんだ。だけども、その誰でも持ってるんだけども、だけど、その自分が特別な人間になるためには、人生、地獄を味わわんといかんと。これが俺の人生の地獄か。まさに、もうこれ以上のですね、苦しみはない。**

**そこで、だけど、つぶれてしまったら、一巻の終わりですからね。そこでつぶれんとね、俺はこのままでは終わらんぞ。このままでくたばってなるものかと。もう一花、咲かせんことには、せっかく生まれてきた価値がないと。なんとか這い上がりたい。もがくんですよね。だけど、なんともならんのですよ。だけども、なんとかしようと思ってるとね、突然、宇宙とつながってしまう。そして、この気が付いたら、その問題から乗り越えてしまって、その問題を乗り越えてしまってる。ああ、助かったというね。そういう時はね、自分が予期もしないようなね、助ける人がやってくるんですよね。なんでやろうなと思うようなね、縁が生まれるんですよ。出会いを呼び寄せるんですね。助けてくれる人が向こうからやってくるんですよ。自分は求めてるわけじゃないんだけどね、命が叫んでるから、その叫びがね、出会いを呼び寄せるんですね。人間の出会いというのは、全部、自分の命を呼び寄せるんですよ。だから、そのふしだらな生活をしてる人には、ふしだらな仲間しかできない。健康な生活をしてる人には、健康な生活する仲間が寄ってくる。自分の命が全部、呼び寄せるんだ。仲間はね。命の叫びに応じて出会いは成り立つんですよ。それが、出会いというものの構造なんですね。**

**この宇宙と自分の命がつながったというね、その自覚ができた時、人間はもうこれ以上のない深さというものをですね、人間性の中に獲得できます。だから、そういう人間の言うことは深いですよ、とにかくは。普通の人間じゃ、ちょっと言えんことを言ったりする。だから、ある時は、その説明の仕方が言葉足らずだったりするとね、なんとなく神がかりになったりしてね、宗教かというような、そういうことになってしまったりするんですけど、それはまだ、まだ言葉が練れてないんですね。自分の実感としてつかんだものが、本当に言葉で表現できる。その努力を積み重ねていったならばね、誰にでもわかるように、誰にでも納得できるように、その世界が説明できるんですよ。その言葉を練り上げていくことによって、自分の意識がどんどん、どんどん、深さを増して、この人にしかこんなことを言えんと。同じことでも、この人が言うたら、ちょっと違うなというね、そういう表現にこうなってきたりするわけですね。**

**だから、誰にでもわかるように説明できないということは、まだ未熟なんですよね。本当にわかった人はね、誰にでもわかるように説明できるんですよ。それが個の限界を超えたこの人間性の豊かさ、広がりというものをですね、持った人のこの値打ちなんですね。だから、学者は学者にしかわからんような論文を書いたりね、学者にしかわからんような言葉で講演したりしてる間は、まだこれは浅いんですね。だけども、学者でものすごい知識やものすごい技術を持ってるのにですね、それを誰にでも、ああ、なるほどなとこう、わかるように説明できるっちゅうことは、ものすごいその人は深さがあるわけですね。だから、いろんなレベルに対応できるというね。そういうレベルっちゅうのは深さですからね。横の広がりはバラエティーですけどね。レベルはこう、縦の構造ですからね。深さがあったらね、本当に、本当にわかったら、易しく言えるんですね。本当にわかってないと、難しくしか言えないんですね。**

**とにかくですね、この深さというものはですね、その個性というものの価値を輝かせるために、ものすごく大事なこれは努力の仕方であります。ぜひこの深さというものを持ってですね、自分の価値を輝かせて、そして、他人を感動させるようなですね、そういうこの仕事の仕方、他人を感動させるような言動というものがですね、命から湧き出てくるような、そういう人物を目指して頑張ってみてもらいたいと。今、どんな仕事をしておってもね、仕事というものは、みんながその人間にさまざまな問題や悩みを与えてくれますからね。だから、この仕事をせんといかんちゅうことはないんだ。どの仕事をしとっても、必ず問題や悩みを与えてくれますから。そして、その仕事から与えられた問題、悩み、その組織が与えられた問題、悩みを通して、自分をこの成長させていったならばね、それがその人の個性の輝き、その人独自の人生というものをね、形成することになるわけであります。**

**とにかく、人智を超えた計らいによって、今、自分に与えられたこの仕事、あるいは自分の手の中に今あるものに真剣に関わるということ以外にね、人生というものを切り開いていく道はありません。作為を弄して、この理性的な判断で自分が動いたらね、その時は迷いであります。今、自分に与えられておるものに真剣に関わる。それが天意をですね、身に託した、天意を身に帯した人間のですね、この自然な生き方だと。とにかくは、アサヒグローバルに入った限りは、この会社で与えられる問題と悩みをですね、自分を成長させてくれる糧として受け止めながら、自分を磨いていく、成長させていくことが、最高の、今の人生、今の生き方として最高の生き方なんですよね。この場所におりながら、この場所でないものを求めたら、それは意識が分散してますから、自分は混乱します。今に集中しなければね、本当の自分の人生というのは磨けません。ぜひ、このアサヒグローバルという会社で、自分の人生を輝かせるような生き方をつくってもらいたいというふうに願っております。どうもありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。社長、お願いします。**

**社長：はい、ご苦労さまでした。今日はね、あまり欠席もなくね、どうしてもマンションのほうが最終、今日が申し込み、その他でね、欠席しておりますが、先生のほうからのね、過分なお褒めの言葉があったりとかね、恐縮です。先ほども先生とお話をしてたんですが、先生はこの体系をいつごろ完成されたんですか。30歳か40歳ごろかなと思ったんですが、28歳の時にね、だいたいこの感性論哲学を、だいたいの体系を完成させられたと。ああ、やっぱりそうかと。やっぱり二十歳代だったんだなというふうに、私は感じました。**

**先生がここでね、いろんなことをお話しされますが、ちょっと、私、言葉が悪い。四日市は言葉が悪いんですよ。口から出任せしゃべってるわけじゃないんですよね。先生の情動を見てるとね、やっぱり大学の講義と同じですよ。90分で先生の話、切れるわけですね。90分ですかね。90分授業だよね、ね。例えば、その180分をね、例えば、10日後にもう一回お願いしますというと、同じことをしゃべられますよ。もう極端な話、一語一句間違いなく同じことを話されます。なぜかというと、これは、科学というか、学問、社会科学なんだよね。毎回、言ってることが変わったら、根拠も論理性もない。先生、おかしいでしょってね、賢い先生から言われますから、だから、先生は何十時間、話される場合でも、原稿をお持ちじゃないんですよ。一つも原稿はないんですね。私みたいなあほは、ちょっとでもしゃべる時でもね、ちょっとしたメモ書きぐらい持ちますよ。これ、誰でもそうですよ。でもね、先生の不思議なところはね、何時間、お話になっても、何十時間、お話になっても、原稿を持たない。口から出任せ言ってるんじゃない。同じことをもう一回、10時間やってもらえませんかといったら、同じことを話されますよね。その辺がね、僕が一番、先生の話を長く聞いてるんでね、そういうところです。**

**それと、なんて言いますかね、高収益だということでね、それは皆さんのおかげだと思いますね。５年ぐらい前からね、20億ぐらいから、23億とか、28とか、30、35、39、今年、45、これね、この不景気な一番大変な時にね、ずっと一点何倍かで、今回、上げてきて、先期も最高益を出してますし、今期もだいたい、今年５月が終わった段階でね、年末終わりました。今年の売上もう決まってるんですね。という意味ではね、また最高益が出ます、ね。そういった意味ではね、皆さんに非常に努力してもらってね、ここまで来たという感謝ですね。**

**また言葉が悪いんですけどね、先生の話が無駄か。芳村思風先生が、なんで建設屋に来て、このくそ忙しい時に、みんなを集めてお話をするんだということなんですが、ね。その辺を皆さん、考えてもらいたいんですね、ね。ちょっと別の言い方をしますと、私は例えば、５年数カ月前に地獄を見ました。これは皆さんの前で言うのは初めてかもわかりませんが、本当に地獄を見てしまったんですね、地獄。地獄はなんだったか。もう言葉では説明できません。感覚で言うと、もうね、地球のね、真っ暗な底を何千メートルか、何万メートルか知らない、ずっと地球の底が見えた。本当に見えた。見えた瞬間に、背骨が凍って砕け散りましたね。体が凍って砕け散ったんですよ。もうずっと真っ暗闇が見えた。本当に見えたんだから、見えたんだよね。見えて、真っ暗闇の中に自分がもう背筋が凍り付いて、凍った体が砕け散りましたね。背骨が砕け散ったんですよ、ね。ああ、これが地獄かと思ったけどね、ね。**

**そういった話をするのはなぜかというとね、もう１つ、極端な言い方をすると、この建物、立派に完成してますよね。一つ一つね、思い出があるわけです。ナカツさんもよくわかってると思うけどね。この天井高ね、この上に軽量がね、何ミリがあって、あそこになんで段差が出てるか。あれ、ぎりぎり、あのエアコンの位置がなんであそこに動いてるかというの、僕は全部、覚えてますよ。この天井の裏側、全部、頭に入ってる。この壁の中も、この床の下も、全部、頭に入ってる。外のタイル割りも全部、頭に入ってますよ、ね。というふうにして、この建物を無理してつくって、また地獄を少し見たんだけども、それは何かというとね、私のリベンジですよ、リベンジ、リベンジ。ばか野郎、このままで終わってたまるかという気持ちなんだよね。その６年ほど前のね、ね。それは、人に対してじゃなしに、自分に対してもそうなんだけども、世間に対して、世間に対するね、やっぱり負けん気というかね、このままでは終わらないぜというようなこと。それがね、この５～６年、毎年ね、皆さんのおかげで一点何倍に仕上がってきたと。**

**ですから、私は経営においても、建設においても、経営においても、思風先生を大事にします。本山博先生を大事にするし、ワタナベショウイチ先生を大事にするし、田辺昇一先生を大事にするし、あんまり金もうけには関係ない話ばっかりする専門家のトタニ先生を大事にしますよ、ね。それでうちの会社は成り立つ、というようなところをね、少しでも皆さんにわかっていただきたい、ね。どの先生も見えるしね。少しね、当社が少し変わってるのは、先生のお話から、一部引用するとね、私は皆さんを相当、助けることができますよ。すごく助けることができますよ、ね。そういうふうにするって決めたわけだから、NBC、野呂先生以来ね。どういうふうに助けられるかというとね、皆さんの給料、私の一存でいくらでも上げられますよ、ね。それと、好きな仕事をしていただけますよ、ね。異動もできますよ、ね。それで、休日が欲しいといったら、１カ月でもあげることができますよ、ね。あと、旅行に行きたいっていったら、行けることもできるし、ね。独立したいっていったら、大いに賛成して、独立させてあげることもできるし、辞めたいといったら、辞めさせてあげるし。今の仕事を３倍させてくれっていうのは、３倍でも、５倍でも、仕事をぶつけることもできるし、やくざに絡まれてる、借金がある、サラ金がある、離婚問題で悩んでる、親子の問題から病気の問題まで、僕は全部できるからね。全部できちゃう。完全にできるわけじゃないけども、相当ね、費用を使ったり、時間を使ったり、お金を使います。そのやり方をね、症状に合わせてお話をすることができる。**

**ですからね、僕も散々、先生方のお世話になってね、今までやってこれてね、逆にいうと、皆さんもあんまり遠慮しないでね、簡単なことだから、お金のことでも、休日のことでも、今、言ったような、やくざのことでも、ね、離婚のことでも、借金のことでも、簡単なことだから、ね。できる人にはできるんだ。簡単なことなんだから。現実にね、今、仕事をしてる問題も、いろんなトラブルに今も、３日ほど会社いないと山ほどの書類でね、いろんなクレームが山ほどあるけどね、ああ、もうこれ、見たくない。もうナカツさん、もうこれ、やっといてって、今も騒いでたけどもね、なんでもね、言ってくださいね。僕としては、べつにそれを、私は恩に着せる人間じゃないですからね、絶対にね。させていただきますと。させていただく喜びというのを感じながらやりますので、特にでかいトラブルとかね、大きな問題とかね、嫌な話とかね、そういうのは、ばんばん解決しますの一人で悩んでないでね、言うと。僕は一人で悩んでないで、先生に相談する。本山先生に相談する。いろんな先生に相談して助けられてきた人間ですから、ね。この会社においては、一応は私がボスですので、ね。一応、なんでも言っていただければ、だいたいね、私、いい加減ですから、ほとんどなんでも聞いてしまいますのでね、ね。前の役員とか、だから、また社長が勝手にと言うけどもね、まあ、ええやないかということでね、それが基本になっておりますので、あまり堅く考えずにね、なんでも相談していただくと。**

**先ほど、先生からも過分なお褒めがあったけれどもね、当社としてはね、今年よりも来年、目標を３年先に絞ってね、勝ち残る予定で頑張りますのでね、その辺は気を抜かないように、こういった勉強をね、役に立てていただいてね、ぜひね、頑張っていただきたいと。あ、そういや、サワダサンノウ先生もいたよね。あの人、営業の話、しに来るっていうけど、全然、営業の話なんて、役に立ってない。立ってないんだよね。全然立ってない。でも、大事だよね。ああいう先生というのはね。はい、ちょっと長くなりましたが、終わりたいと思います。ありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**